

# 学内広報

2012.12.14

no.1432



特別号

2011年(第61回)学生生活実態調査



## 目 次

|                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 調査の概要             | 第2部 学生生活の背景              |
| 報告について            | 1 家庭の状況…………… 22          |
| 第1部 学生生活の評価と将来の選択 | 2 生活費の状況…………… 25         |
| 1 大学院入学の目的…………… 3 | 3 研究奨励金及び奨学金…………… 27     |
| 2 学会参加・留学…………… 5  | 4 アルバイト…………… 29          |
| 3 研究活動…………… 7     | 5 研究・学生生活のサポート体制…………… 31 |
| 4 就職…………… 14      | 特殊分析の試み…………… 33          |
| 5 不安・悩み…………… 16   |                          |
| 6 大学への要望…………… 20  |                          |

### 調査の概要

#### 1. 調査票の作成

2011年（平成23年）5月から10月にかけて、学生委員会学生生活調査室で調査内容の企画立案を行った。

#### 2. 調査の期間

2011年（平成23年）11月下旬～12月下旬。

#### 3. 調査の対象及び抽出率

大学院男子・女子学生。研究科系統別無作為抽出法で、在籍者数の1/4を抽出。

#### 4. 調査の方法

郵送調査で行い、対象者自身が記入する（自記式）方法。

#### 5. 調査の内容

I. 基本的事項、II. 大学院入学の目的、III. 学会参加・留学、研究活動、IV. 就職、V. 不安・悩み、VI. 大学への要望、VII. 家庭の状況、VIII. 生活費の状況、IX. 研究奨励金及び奨学金、X. アルバイト、XI. 研究・学生生活のサポート体制、XII. 具体的記述

### 報告について

#### 1. 今回は、2009年（第59回）と同様に、大学院男子・女子学生を対象として学生生活実態調査を行った。

集計結果の分析に当たっては、研究科間・年度間・男女間などの相違に注目し、特異な数値傾向の把握に努めた。

#### 2. 学内広報掲載の報告については、調査票・単純集計表及びクロス集計表を省略した。省略した表等については、ホームページ掲載の報告を参照されたい。

#### 3. 平成21年度までは、2分の1程度の具体的記述を原文のまま報告書に記載していたが、読む人によって個人が特定できる可能性があること、さらに、報告書掲載の基準が恣意的になりやすいこともあり、平成22年度より具体的記述は報告書に掲載しないこととした。ただ、このことは具体的記述を無視するとか軽視することを意味しているわけではなく、それぞれの具体的記述は学生生活調査室で検討するとともに、担当理事によっても検討され、大学の施策の改善に役立てられている。

#### 4. 複数回答の百分率（パーセント）は、非該当及び無回答を除く総回答数に対するもので、合計が100パーセントとなる。また、本文中の「ポイント」とは、総数の百分率（パーセンテージ・ポイント）を表す。

#### 5. 今回の単純集計表及びクロス集計表は、大学総合教育研究センターの作成による。

## グラフと表について

1. 今回、本文に掲載した経年変化のグラフと表については、1985年調査までさかのぼって取り上げた項目がいくつかあり、「表1」に1958年以降の調査の実施状況を表示した。
2. 文中に掲げたグラフと表については、それぞれの年の比較を見やすくするため「無回答」及び「非該当」を除いた比率で作成している。また、個々の数値を四捨五入しているため、合計が100%に満たないものと100%を超えるものがある。
3. 複数回答の設問については、非該当及び無回答を除く総回答数に対するもので、合計が100パーセントとなる。
4. 平均値の算出は、無回答のものを除く該当者平均を求めた。
5. 作表の説明変数として用いた用語の定義は、次のとおりである。
  - 「全体」・・・・・・・・・・・・・・・・回答者全員の比率を示す。
  - 「文科系」「理科系」・・・・・・・・在籍する研究科等により二つの系に区分したものを示す。

表1 学生生活実態調査（大学院学生）実施状況一覧表

| 回数   | 調査年月     | 対象学生             | 抽出率                               | 対象者数     | 回収率       | 調査方法              |
|------|----------|------------------|-----------------------------------|----------|-----------|-------------------|
| 第9回  | 1958年12月 | 課程在籍者            | 男子 1/5<br>女子 1/5                  | 人<br>248 | %<br>95.6 | 面接調査<br>(一部郵送)    |
| 第11回 | 1960年11月 | 課程在籍者<br>+ 留年者   | 男子 1/3<br>女子 全数<br>留年者 全数         | 785      | 85.2      | 〃                 |
| 第17回 | 1966年12月 | 課程在籍者            | 全 数                               | 3,002    | 48.7      | 研究科窓口配布<br>(一部郵送) |
| 第28回 | 1978年12月 | 課程在籍者            | 男子 1/4<br>女子 全数                   | 1,177    | 66.2      | 郵送自記式             |
| 第35回 | 1985年11月 | 課程在籍者<br>+ OM、OD | 男子 1/2~1/4<br>女子 1/2<br>OM、OD 1/2 | 1,382    | 66.3      | 〃                 |
| 第42回 | 1992年11月 | 課程在籍者            | 男子(文) 1/2<br>男子(理) 1/6<br>女子 1/2  | 1,496    | 59.8      | 〃                 |
| 第49回 | 1999年11月 | 課程在籍者<br>+ OM、OD | 男子 1/4<br>女子 1/4                  | 2,099    | 49.5      | 〃                 |
| 第54回 | 2004年11月 | 課程在籍者            | 男子 1/4<br>女子 1/4                  | 2,539    | 40.6      | 〃                 |
| 第59回 | 2009年11月 | 課程在籍者            | 男子 1/4<br>女子 1/4                  | 2,675    | 49.9      | 〃                 |
| 第61回 | 2011年11月 | 課程在籍者            | 男子 1/4<br>女子 1/4                  | 2,621    | 45.3      | 〃                 |

注 1) 「OM」はオーバーマスター、「OD」はオーバードクターの略を示す。

2) 「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。但し、1992年調査は「OM、OD」を除き「外国人留学生」を含む。

表2 2011年(第61回)学生生活実態調査回収状況一覧

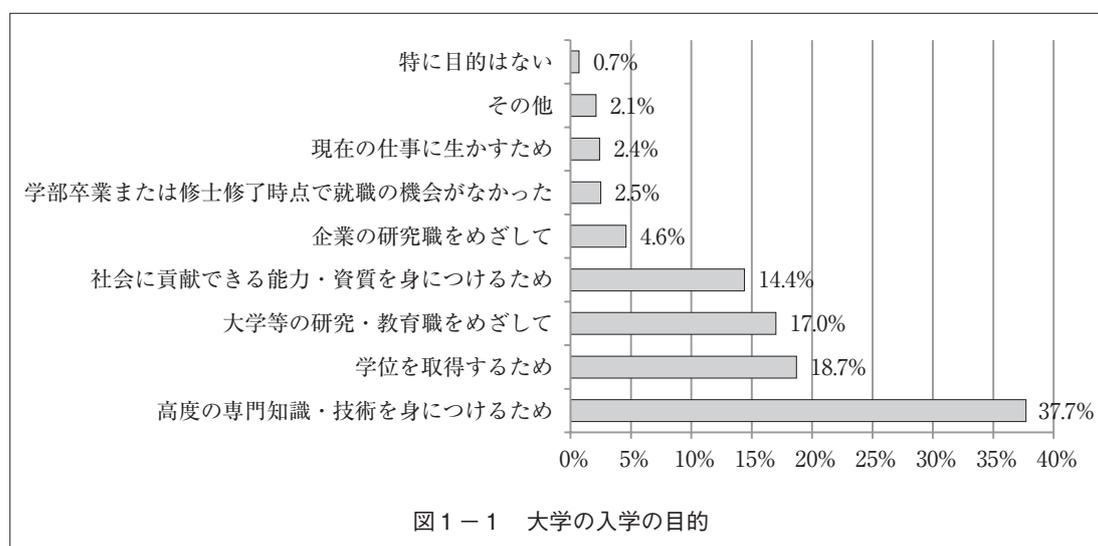
| 学部名           | 修士課程及び専門職学位課程 |     |      |      |     |       | 博士課程 |     |      |      |     |       | 全体    |       |      |
|---------------|---------------|-----|------|------|-----|-------|------|-----|------|------|-----|-------|-------|-------|------|
|               | 男子            |     |      | 女子   |     |       | 男子   |     |      | 女子   |     |       | 対象者数  | 回収数   | 回収率  |
|               | 対象者数          | 回収数 | 回収率  | 対象者数 | 回収数 | 回収率   | 対象者数 | 回収数 | 回収率  | 対象者数 | 回収数 | 回収率   | 対象者数  | 回収数   | 回収率  |
| 人文社会系研究科      | 37            | 13  | 35.1 | 20   | 14  | 70.0  | 36   | 15  | 41.7 | 20   | 14  | 70.0  | 113   | 56    | 49.6 |
| 教育学研究科        | 24            | 9   | 37.5 | 20   | 14  | 70.0  | 24   | 13  | 54.2 | 15   | 8   | 53.3  | 83    | 44    | 53.0 |
| 法学政治学研究科      | 100           | 42  | 42.0 | 54   | 24  | 44.4  | 7    | 3   | 42.9 | 2    | 2   | 100.0 | 163   | 71    | 43.6 |
| 経済学研究科        | 27            | 10  | 37.0 | 3    | 1   | 33.3  | 15   | 7   | 46.7 | 3    | 2   | 66.7  | 48    | 20    | 41.7 |
| 総合文化研究科       | 70            | 35  | 50.0 | 40   | 24  | 60.0  | 73   | 37  | 50.7 | 40   | 20  | 50.0  | 223   | 116   | 52.0 |
| 理学系研究科        | 145           | 61  | 42.1 | 28   | 16  | 57.1  | 114  | 59  | 51.8 | 24   | 8   | 33.3  | 311   | 144   | 46.3 |
| 工学系研究科        | 378           | 141 | 37.3 | 38   | 20  | 52.6  | 127  | 55  | 43.3 | 17   | 9   | 52.9  | 560   | 225   | 40.2 |
| 農学生命科学研究科     | 98            | 36  | 36.7 | 41   | 25  | 61.0  | 64   | 32  | 50.0 | 22   | 11  | 50.0  | 225   | 104   | 46.2 |
| 医学系研究科        | 17            | 9   | 52.9 | 24   | 14  | 58.3  | 122  | 45  | 36.9 | 67   | 37  | 55.2  | 230   | 105   | 45.7 |
| 薬学系研究科        | 32            | 12  | 37.5 | 12   | 8   | 66.7  | 32   | 15  | 46.9 | 8    | 7   | 87.5  | 84    | 42    | 50.0 |
| 数理科学研究科       | 20            | 11  | 55.0 | 1    | 1   | 100.0 | 14   | 6   | 42.9 |      |     |       | 35    | 18    | 51.4 |
| 新領域創成科学研究科    | 172           | 80  | 46.5 | 42   | 20  | 47.6  | 71   | 36  | 50.7 | 22   | 12  | 54.5  | 307   | 148   | 48.2 |
| 情報理工学系研究科     | 86            | 31  | 36.0 | 3    | 1   | 33.3  | 34   | 16  | 47.1 | 3    | 1   | 33.3  | 126   | 49    | 38.9 |
| 学際情報学府        | 27            | 11  | 40.7 | 8    | 2   | 25.0  | 15   | 5   | 33.3 | 8    | 3   | 37.5  | 58    | 21    | 36.2 |
| 公共政策学教育部      | 40            | 16  | 40.0 | 15   | 8   | 53.3  |      |     |      |      |     |       | 55    | 24    | 43.6 |
| 合計            | 1,273         | 517 | 40.6 | 349  | 192 | 55.0  | 748  | 344 | 46.0 | 251  | 134 | 53.4  | 2,621 | 1,187 | 45.3 |
| 2009年(第59回)調査 | 1,275         | 583 | 45.7 | 375  | 224 | 59.7  | 760  | 369 | 48.6 | 265  | 159 | 60.0  | 2,675 | 1,335 | 49.9 |

## 第1部 学生生活の評価と将来の選択

### 1-1. 大学院入学の目的

入学の目的は「高度の専門知識・技術を身につけるため」37.7%  
 入学の動機は「自分の志望した研究科（専攻分野）があったから」28.4%  
 「スタッフ・環境・設備が優れているから」24.2%

大学院入学の目的は、1999年の第49回から続けて、「高度の専門知識・技術を身につけるため」が37.7%で最も多く、次いで、「学位を取得するため」が18.7%、「大学等の研究・教育職をめざして」が17.0%、前回からの新たな選択項目の「社会に貢献できる能力・資質を身につけるため」が14.4%となっている（図1-1 クロス集計表1-1表）。



大学院入学の目的について、専門職学位課程と修士課程では、「高度の専門的知識・技術を身につけるため」がそれぞれ43.3%と42.8%と最も高い割合を示している。「獣医学又は医学博士課程」では「学位を取得するため」が36.8%と最も高い割合となっている。また、博士課程では「大学等の研究・教育職をめざして」も27.4%と相対的に高い割合となっている（図1-2）。

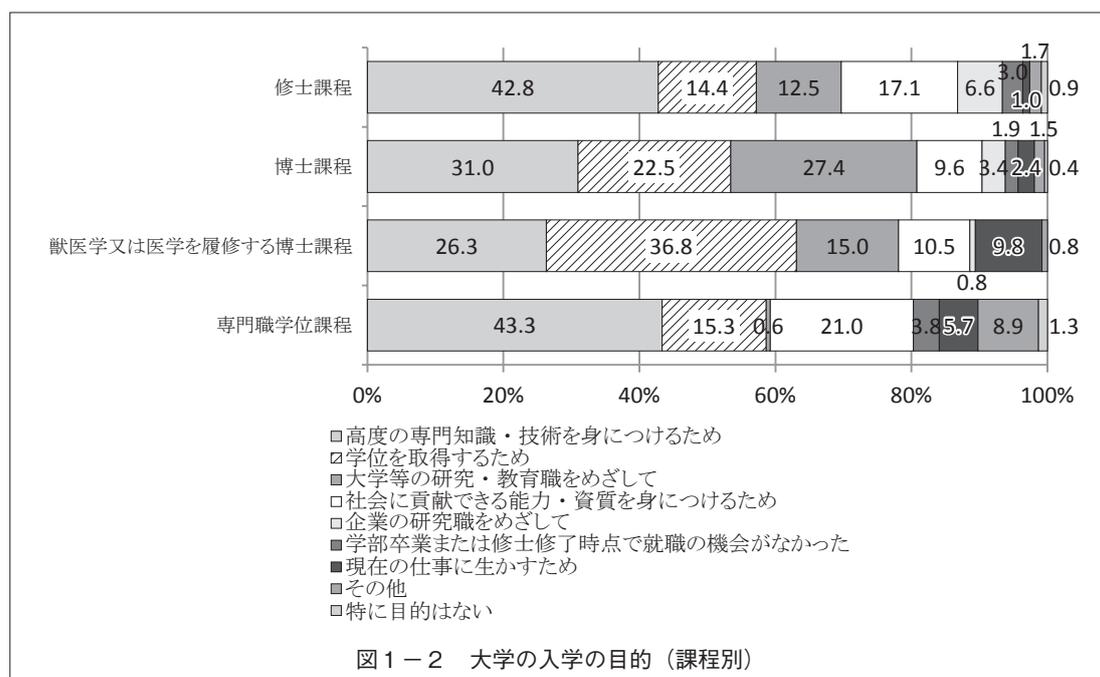


図1-2 大学の入学の目的 (課程別)

東大入学の動機については、1999年（第49回）調査までは主たる動機を重視した順に、第1位から第3位まで調査したが、2004年（第54回）調査からは順位をつけずに、主たる動機を無順位に三つまで選択可として調査した。前回と今回との比較では、前回調査同様「自分の志望した研究科（専攻分野）があったから」が28.4%で最も多く、次いで「スタッフ・環境・設備が優れているから」24.2%、「将来の進路を考えて」13.8%と続き、前回調査と同順位となっている。これ以外の選択肢はいずれも10%以下であり、その中では、「社会的評価が高いから」9.6%で、前回調査と同様第4位となっている（図2、クロス集計表1-2表）。

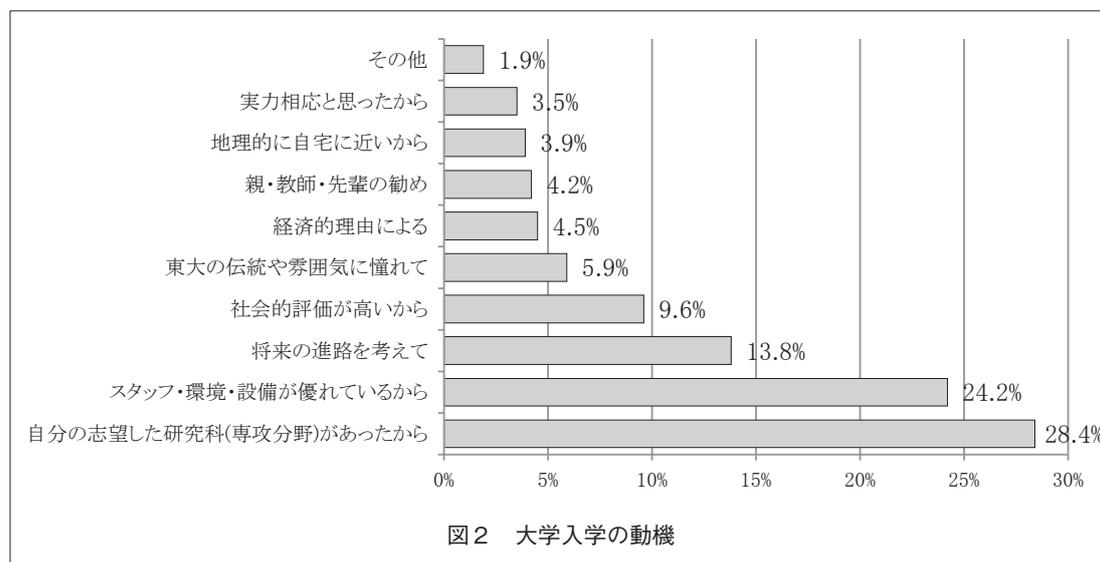


図2 大学入学の動機

「現在所属する大学院を選ぶ際、他にどのような進路を考えましたか」の間では、前回と同様「他大学の大学院」が34.3%で最も多くなり、次いで、「考えなかった」が27.9%、「本学の他の研究科」15.8%の順となっており、他大学の大学院への進学が以前に比べて重要な選択肢となってきたことが注目される（クロス集計表1-3表）。

最終的に本学を選んだ理由は、「希望専攻分野が東大の方が充実していた」45.1%で前回同様第1位で、次いで「東大の方がネームバリューがあると思った」が22.4%となっている。（クロス集計表1-4表）。

## 1-2. 学会参加・留学

- ・学会（国内）の「所属数」2.5、「参加数」2.6回、「発表数」2.8件
- ・海外学術調査の経験「ある」14.2%、留学の経験「ある」4.3%
- ・留学希望者60.5%、留学希望先は希望者のうち「北米」44.0%、「西ヨーロッパ」40.8%

### 1-2-1. 学会参加

現在所属している国内の学会数は、「1」が34.0%、「2」17.7%、「3以上」13.4%となっている。前回調査（2009年（第59回））とほぼ同様の結果である。前回同様に、理科系は文科系に比べ多くの学会に所属しており、所属していない者は文科系で51.5%に対して理科系では28.6%となっている。また、修士課程在籍者の半数以上（53.9%）、博士課程在籍者の9割（89.8%）が何らかの学会に所属している。国内に比べ国外の学会に所属している者は、あまり多くはみうけられず、「1」が1割（10.6%）で、それ以上は極めて少ないこれも前回と同様の結果である。また、文科系と理科系の差もあまりみられない。（クロス集計表2-1～2表）。

過去1年間の国内の学会参加回数は「1回」23.1%、「2回」21.7%、「3回以上」が25.3%で、発表件数は「1件」26.8%、「2件」14.2%、「3件以上」が13.2%である。また、国外の学会参加回数は「1回」16.0%、「2回」6.2%で、発表件数は「1件」15.8%、「2件」4.9%である。これらの結果も前回とほとんど変わっていない（クロス集計表2-3～6表）。

### 1-2-2. 留学等

大学院入学後、海外学術調査の経験が「ある」と答えた者は14.2%で前回調査と比較して、2.4ポイントの減少となっている。しかし、前々回とほぼ同じ結果である。修士課程在籍者（9.7%）より博士課程在籍者（25.1%）の方が高い。また、女子17.4%は男子13.0%に比べて海外学術調査の経験者が多い傾向にあるがその差は4.4ポイントである（クロス集計表2-7表）。

「大学院に入学してから海外留学をした体験がありますか」という問に、「ある」と答えた者は、全体で4.3%となっている。前回調査と比べて、2.2ポイントの減少となっている。また、海外学術調査の経験と同様、博士課程在籍者（9.7%）と女子（5.6%）の方が高い割合を示している（クロス集計表2-8表）。

「大学院在学期間中、海外留学の機会があれば希望しますか」という問に、「留学したい」35.2%、「どちらかといえば留学したい」25.3%となっており、これら双方を合わせると全体では60.5%で、男子の場合58.1%、女子の場合67.1%と女子の方が留学希望が高い。（図3-1、クロス集計表2-11表）。

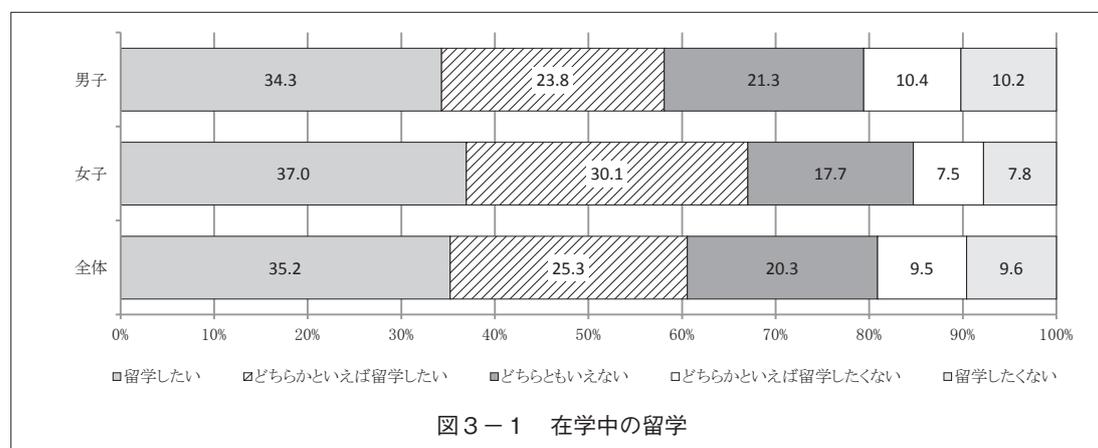
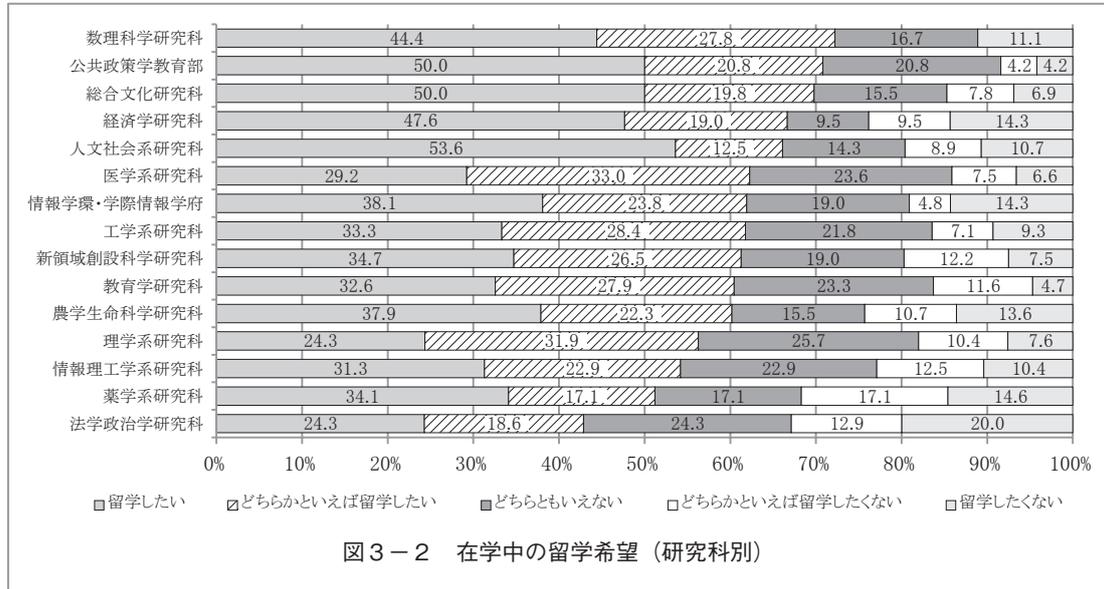


図3-1 在学中の留学

研究科により留学希望に差異があり、希望の多いところは、数理科学研究科（72.2%。「留学したい」と「どちらかといえば留学したい」の計）、公共政策学教育部（70.8%）、総合文化研究科（69.8%）、経済学研究科（66.6%）となっている（図3-2）。

留学期間については、「1年以上」が37.2%と最も高い割合で、次いで「半年以上、1年未満」27.6%と半数以上が長期の留学を希望している。文科系（56.7%）の方が理科系（29.5%）より「1年以上」の留学を希望する比率が高い。（クロス集計表2-12表）



「留学に際して学位取得をめざしますか」という問に対して、修士課程では19.6%、博士課程では25.1%が博士学位の取得を希望している。ただし「学位取得をめざさない」者は、修士課程で58.7%、博士課程で65.5%、獣医学・医学を履修する博士課程で54.5%となっている。これに対して、専門職学位課程では専門職学位取得を40.5%が希望している。

「留学したくない理由」として、最も高い割合を示しているのは、「語学力の問題」（23.2%）、次いで「経済的な問題」（20.3%）、「東京大学の教育で十分」（17.0%）などとなっている。「留年しなければならない」（12.1%）や「大学の年間スケジュールとタイミングが合わない」（10.9%）や「就職に不利」（4.7%）などのネガティブな理由はあまり多くない。（クロス集計表2-13~14）

「外国の大学と交換留学制度があれば留学したいと思っていますか」という問に、72.0%（男子69.7%、女子77.7%）が「条件によっては留学したい」と回答しており、前回調査（70.2%）と同様の結果となっている（クロス集計表2-15表）。

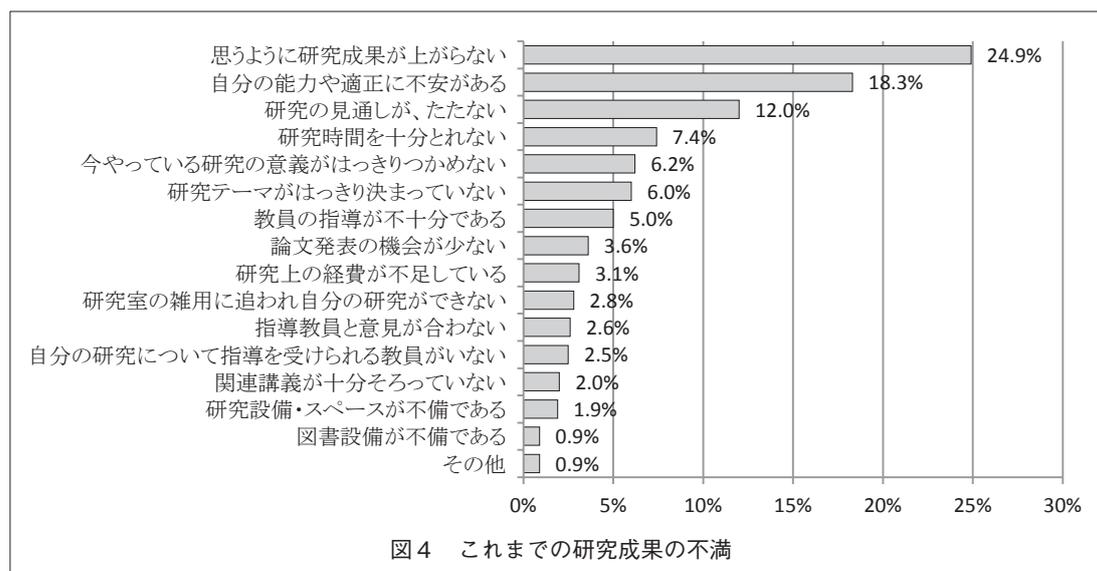
交換留学制度があれば留学先としたい地域は、前回に続き今回の調査でも順位をつけずに、主たる地域を無順位に2つまで選択可として調査した。その結果、前回調査で第2位（前々回調査では第1位）の「北アメリカ」が44.0%で第1位、次いで、前回第1位の「西ヨーロッパ」が40.8%、「アジア」が5.7%の順となり欧米重視の傾向が窺われる（クロス集計表2-16表）。

### 1-3. 研究活動

- ・自分の研究成果に対する「不満」「やや不満」が40.6%
- ・研究経費の自己負担は年平均154,600円（前回調査に比べ約27,800円減少）
- ・「非常勤講師或いはT A、R Aの経験がある」理科系56.9%、文科系40.3%
- ・「専用の机がある」理科系92.1%、文科系22.8%
- ・「1週間平均の研究時間数」理科系47.2時間、文科系38.0時間
- ・平日9時以降までキャンパスにいたことがある理科系87.9%、文科系64.7%

「あなたご自身のこれまでの研究成果についてどうお考えですか」という問いに、「不満」16.6%、「やや不満」24.0%と合わせて不満が4割（40.6%）となっており、前回より3ポイントほど増加している。文科系（35.9%）より、理科系（42.4%）の方が、不満が高くなっている。

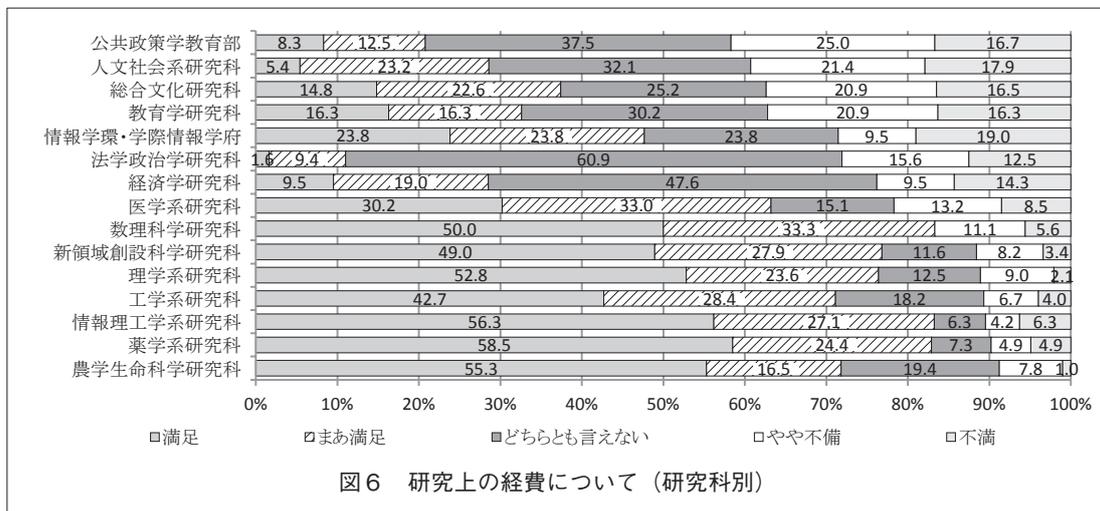
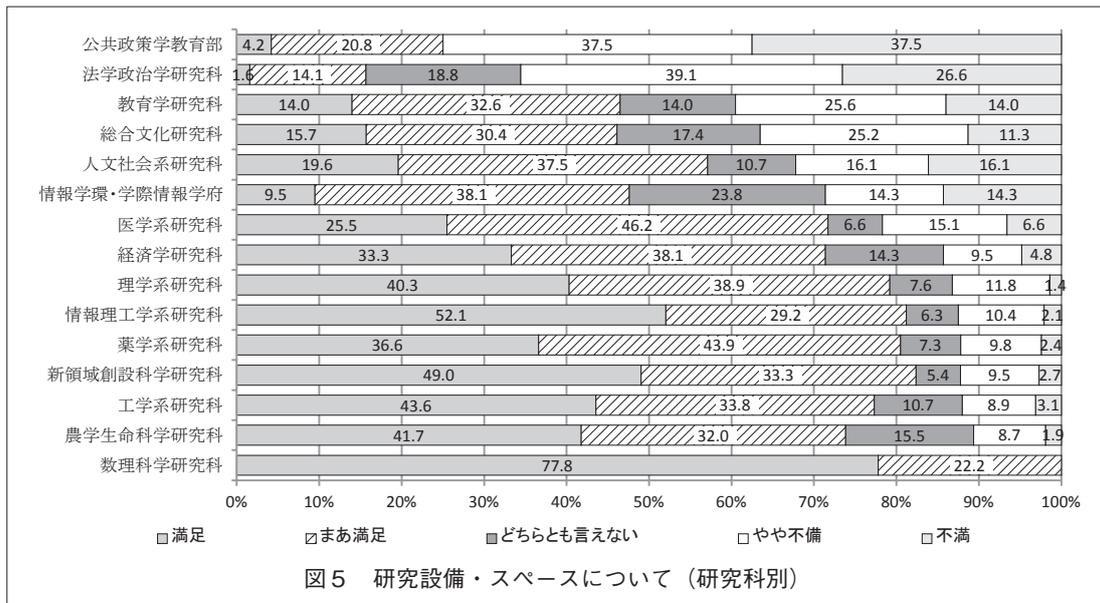
研究の成果に「不満、やや不満」と答えた者に、「不満と感じている問題」を尋ねたが、結果は多様となっている。第1位から第3位は、「思うように研究成果が上がらない」24.9%、「自分の能力や適性に不安がある」18.3%、「研究の見通しがたたない」12.0%となり、前々回・前回調査と同じ傾向にある。次いで、「研究時間が十分とれない」7.4%、「今やっている研究の意義がはっきりつかめない」6.2%、「研究テーマがはっきり決まっていない」6.0%、「教員の指導が不十分である」5.0%となっている（図4、クロス集計表3-1～2表）。



理科系では、文科系より「思うように研究成果が上がらない」（文科系20.7%、理科系26.3%）点を案じている。理科系のほとんどの研究科では「思うように研究成果が上がらない」が20%台で、最も大きな理由であり、特に薬学系研究科では33.3%の学生がそれを挙げているのに対して、公共政策学教育部では皆無となっており、大きな差が見られる（クロス集計表3-2表）。

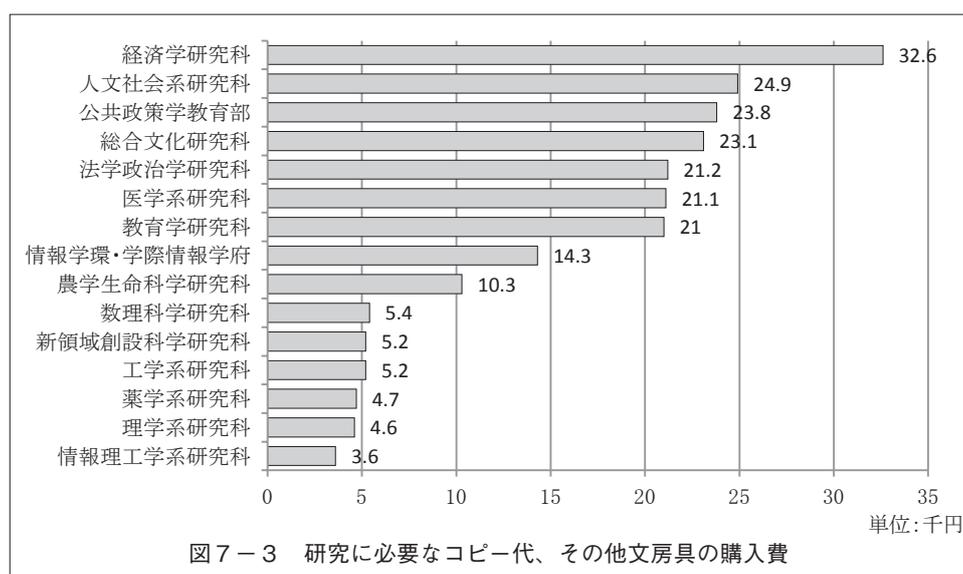
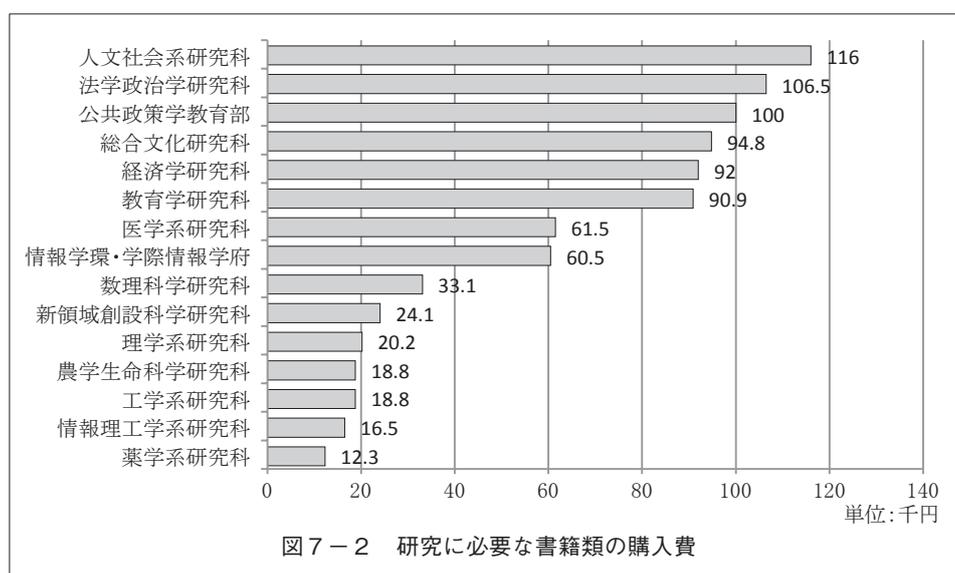
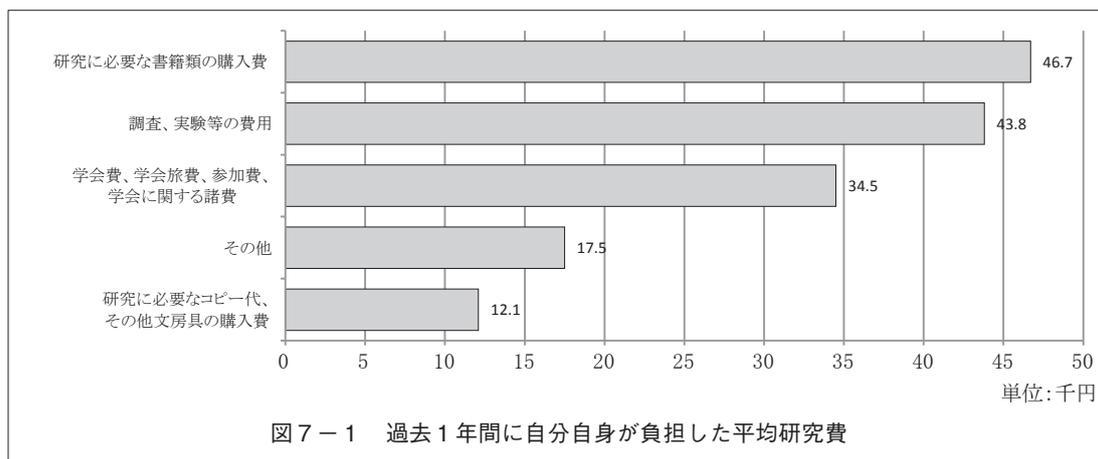
研究室での日常生活の中で、複数の項目について満足度を尋ねたところ（以下、満足度は「満足」「まあ満足」の計、不満度は「やや不満」「不満」の計）、「研究設備・スペースについて」は、総じて不満と答える者は21.8%で、文科系（43.3%）は理科系（13.5%）の3倍以上になっている。「研究上の経費について」についても、不満を示す割合（18.9%）は研究スペースと同様の傾向が見られ、文科系（35.3%）は理科系（12.5%）の3倍に近い。このように、これらの項目

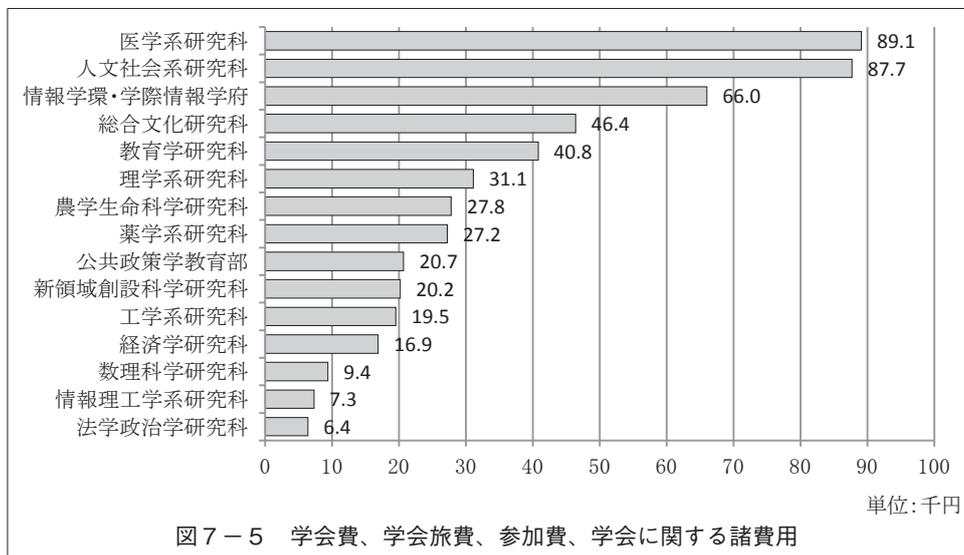
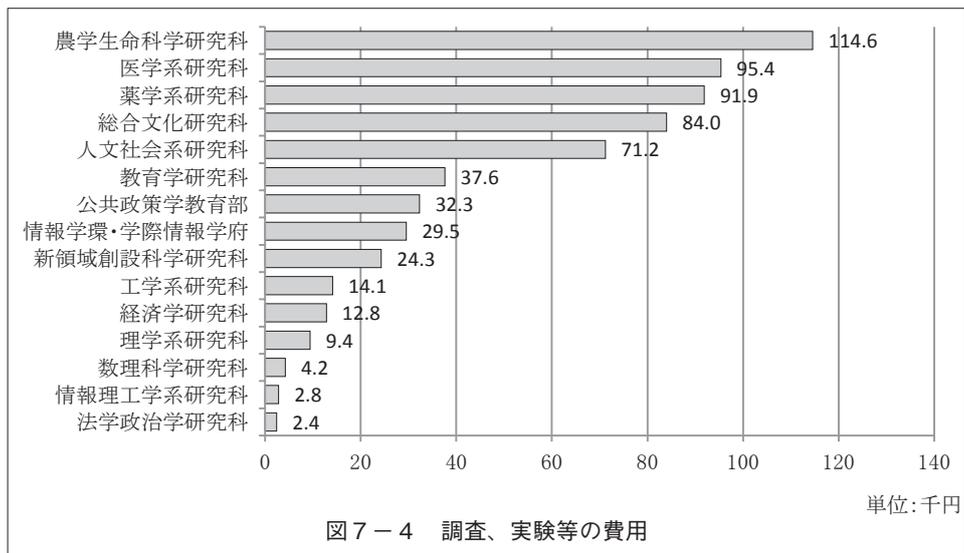
では文科系と理科系には有意な差が認められる。とりわけ不満の高かったものの中で、「研究設備・スペース」については公共政策学教育部で75.0%と法学政治学研究科で65.7%と不満が高く、これに教育学研究科（39.6%）、総合文化研究科（36.5%）、人文社会系研究科（32.2%）が続いている。「研究上の経費」については公共政策学教育部（41.7%）、人文社会系研究科（39.3%）、総合文化研究科（37.4%）、教育学研究科（37.2%）、法学政治学研究科（28.1%）、経済学研究科（23.8%）と文科系の多くの研究科等で3～4割前後が不満を持っている。次に、「人間関係について」は、「不満」4.8%、「やや不満」9.4%と合わせて14.2%が不満を示している。「指導教員の研究指導方法について」は、前回調査とは逆転し、文科系（69.7%）の方が理科系（62.8%）に比べやや満足度が高い。「所属研究科事務の対応について」は、69.0%が満足している。また、男女別にみると、「人間関係」を除く全ての項目で女子は男子よりも総じて「不満」と回答しており、前回調査の状況と変わっていない（図5、図6、クロス集計表3-3-1～5表）。



「あなたの研究にあなた自身が負担しているお金は過去1年間でどれくらいですか」という質問に対して、各費目の平均の合計では154,600円（10の位以下四捨五入）と回答されている。男女別にみると、全ての項目で女子の負担額が大きく、平均合計額も女子（211,800円）が男子（133,000円）を大きく上回る。また、文科系の負担額（246,700円）は理科系（119,900円）の2倍以上となっている。（図7-1～5、クロス集計表3-4表）。

「大学、短大などの非常勤講師或いはTA、RAをしていますか」（TAはTeaching Assistant、RAはResearch Assistantの略）という問いに、「していない（したことがない）」者が47.8%（前回調査50.5%）であり、「過去にした





ことがある」が26.9%となっている。「現在している」と回答があったのは25.3%で前回調査からほぼ横ばいである。系別にみると、「していない（したことがない）」者について、文科系59.8%が理科系43.1%に比べて多い。また、男女別にみると男子47.0%、女子50.2%と女子の未経験の割合がやや多く、課程別では専門職学位課程の未経験の割合が91.1%ときわめて多くなっている（クロス集計表3-5表）。

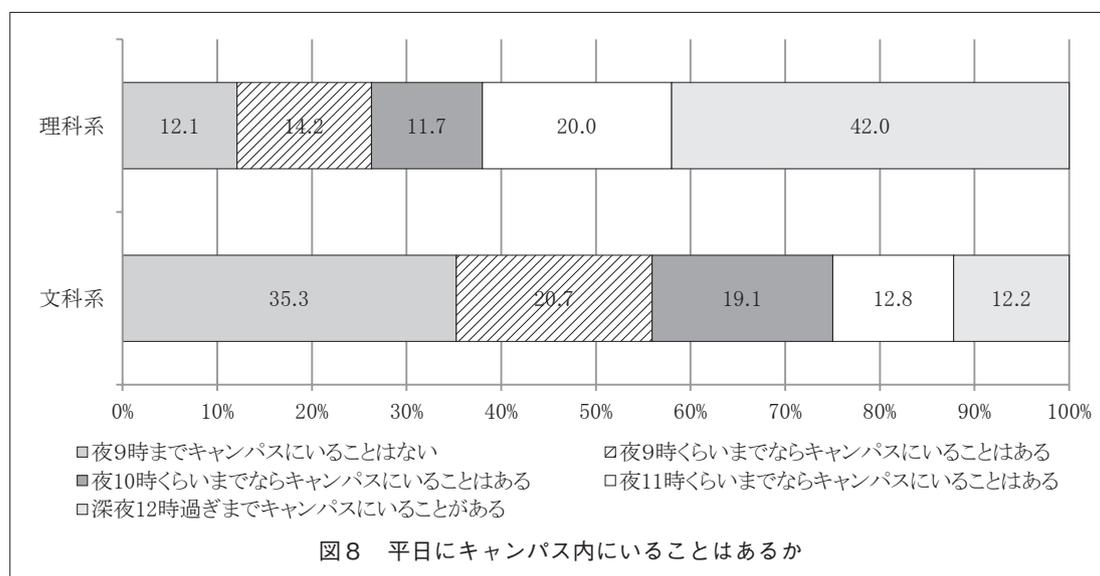
「あなたが所属している研究室（実験室を含む）や学習スペースについて」たずねたところ、「24時間自由に利用できるスペース（研究室や実験室など）がある」と答えた者が75.3%と最も多く、「開設時間以外に利用することができない」11.5%、「一時的に鍵やカードなどを貸与されて利用できるスペース（研究室や実験室など）がある」8.7%などとなり、「利用できるスペースがない」と答えた者は1.5%となっている。理科系では90.3%が「24時間自由に利用できるスペース（研究室や実験室など）がある」と回答しており、文科系の36.3%と大きな差がある（クロス集計表3-7表）。

「研究室に、あなたの専用又は共用の机はありますか」の間に、「専用の机がある」72.9%、「共用の机がある」15.7%と回答している。理科系では「専用の机がある」が92.1%を占めているが、文科系では「どちらもない」が36.3%となり、文科系と理科系では状況はかなり異なっている（クロス集計表3-8表）。

「1週間に何日ぐらい大学に来ますか」との間に、「5日」28.8%、「6日」26.4%、「3～4日」19.3%の順で、合計で「3

～6日」と回答する者が74.5%（文科系65.3%、理科系77.9%）となっている。大学に来る回数の多い5～7日をとっても、文科系（が41.7%）より理科系（同74.5%）の方が高い割合を占めている（クロス集計表3-6表）。

今回より新たに加わった「平日の夜遅くまでキャンパス内にいることがありますか」という質問に対して、「夜9時までキャンパス内にはいることはない」と答えた者は、18.5%で、「深夜12時過ぎまでキャンパス内にはいることがある」と回答した者の比率が最も高く33.6%、次いで、「夜11時くらいまでならキャンパス内にはいることがある」18.1%、「夜9時くらいまでならキャンパス内にはいることはある」16.0%、「夜10時くらいまでならキャンパス内にはいることはある」13.8%となっている。女子は「夜9時までキャンパス内にはいることはない」（女子23.4%、男子16.5%）、「夜9時くらいまでならキャンパス内にはいることはある」（女子21.2%、男子14.0%）と、男子に比べ夜遅くまでキャンパス内にはいる者の比率は低くなっている。また、同じように、「夜9時までキャンパス内にはいることはない」（文科系35.3%、理科系12.1%）、「夜9時くらいまでならキャンパス内にはいることはある」（文科系20.7%、理科系14.2%）と、文科系に比べ理科系の方が夜遅くまでキャンパス内にはいる者の比率は高くなっている。特に理科系では「深夜12時過ぎまでキャンパス内にはいることがある」と答えた者が42.0%とかなり高い割合を占めている。キャンパス別にも理科系がほとんどを占める柏で「深夜12時過ぎまでキャンパス内にはいることがある」と答えた者が55.1%と過半数を超えている（図8、クロス集計表3-9表）。



「キャンパス内にはいることはある」と答えた者にその頻度をたずねたところ、最も高い比率を示したのは、「ほぼ毎日」26.9%で、次いで「週に1、2回くらい」26.8%、「週に3、4回くらい」23.0%となっている。男女別と文科系理科系別、キャンパス別の傾向は、前問と同様である（クロス集計表3-10表）。

また、「あなたはこの学期が始まってから昼間を含めて土曜日・日曜日・祝日にキャンパス内にはいることがありますか」という問に対して、82.3%があると答えている。男子84.0%に対して女子78.5%、文科系70.6%に対して理科系86.8%、柏キャンパスでは91.8%とこれも前々問と前問と同じ傾向である。

博士論文の執筆予定の問に、「在籍中に書く予定」と答える者が81.8%、「既にかいた」9.5%、「在籍中に書く予定はないが、課程博士は取りたい」7.0%となっている。「既にかいた」と答えた者は、理科系（11.9%）が文科系（2.5%）の約5倍になっている。また「在籍中に書く予定」は、法学政治学研究所と情報学環・学際情報学府の100%から人文社会系研究科の67.9%まで差が見られる（クロス集計表3-20表）。

「研究上（研究発表と論文作成等を含む）使用する主な言語はどれですか」（主たるものを2つまで選択）の問に、「日本語」53.8%、「英語」43.2%と回答する者が大部分を占めており、他を挙げる者は「独語」1.0%、「仏語」0.8%、「中国語」0.2%と少ない。前回調査と比べて、中国語と独語が逆転している。使用する外国語について、理科系は専ら「英語」

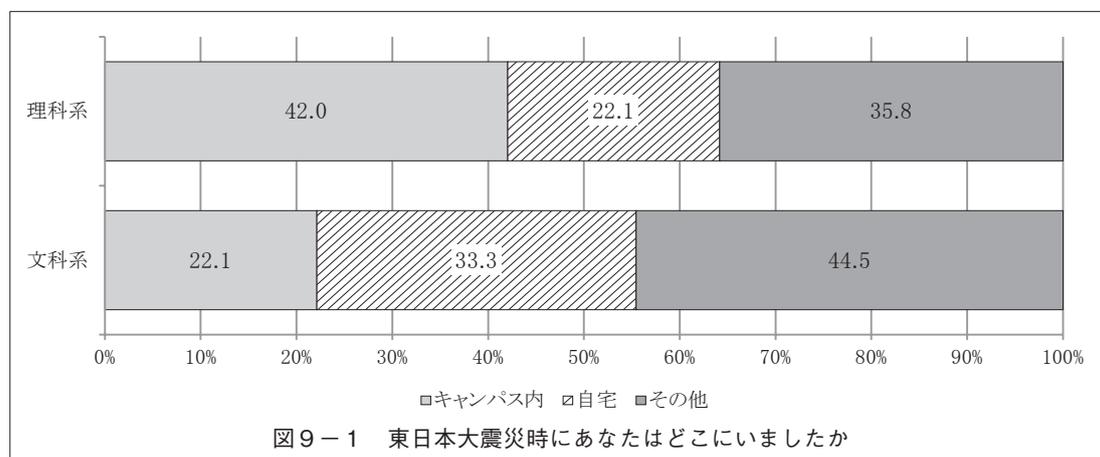
47.0%に集中し、文科系は「英語」31.8%、「独語」3.8%、「仏語」2.9%、「中国語」0.8%と比較的多様になっている（クロス集計表3-21表）。

1日平均の研究時間は7.9（前回調査7.9）時間である。文科系は6.2（前回調査6.2）時間、理科系は8.5（前回調査8.6）時間で、理科系は文科系に比べ1日平均2.3時間多くなっている。1週間平均の研究時間は平均44.7時間（文科系38.0時間、理科系47.2時間）である。文科系は前回調査（38.6時間）に比べて0.6時間減少し、理科系は文科系に比べ1週間平均9.2時間多くなっている（クロス集計表3-22-1～2表）。

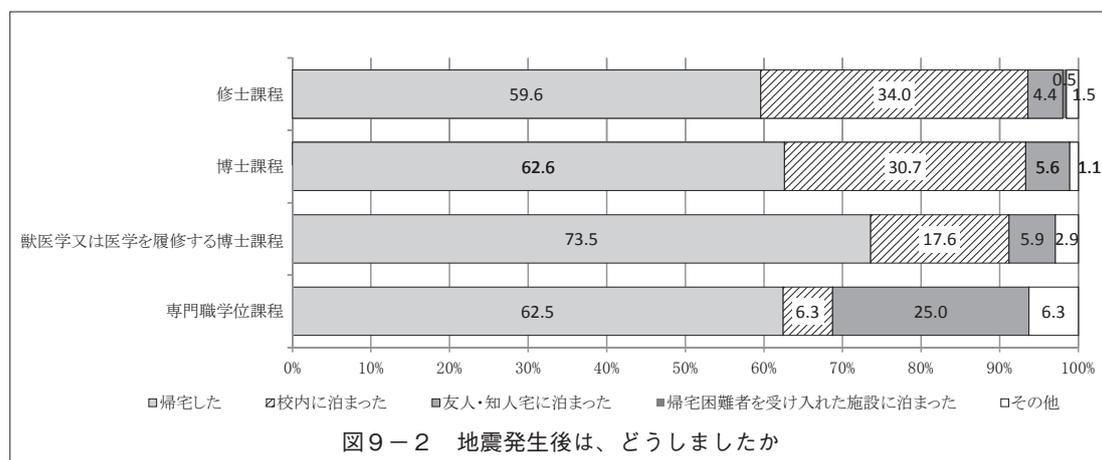
## 東日本大震災時の状況

- ・東日本大震災時に「キャンパス内にいた」36.5%、「自宅」25.2%、「その他」38.3%。  
理科系では42.0%に対して文科系では22.1%が「キャンパス内にいた」
- ・地震発生後に「帰宅」62.0%、「校内に泊まった」30.3%。
- ・地震発生後の研究室や部局の対応について「行動について指示を受けた」40.8%、「情報やニュースの伝達を受けた」30.3%などで、「何も無かった」は16.3%。
- ・「大学に非常時に備えた備蓄がある」のを知っていた者は24.6%

「東日本大震災発生時にあなたはどこにいましたか」という問に対して、「キャンパス内にいた」36.5%が最も高い割合を占め、次いで「その他」38.3%、「自宅」25.2%となっている。理科系では「キャンパス内にいた」は42.0%に対して文科系では22.1%と倍近い差がある。また、男子と女子では差は見られない。博士課程「キャンパス内にいた」が44.4%と高い割合を占めているのに対して、専門職学位課程では「その他」が49.5%となっている（図9-1、クロス集計表3-13表）



「地震発生後は、どうしましたか」という問に対して、「帰宅した」が62.0%と最も高い割合を示しており、次いで、「校内に泊まった」30.3%、「友人・知人宅に泊まった」5.8%などとなっている。女子では、「友人・知人宅に泊まった」が10.0%と男子の4.4%に比べ、倍以上となっている。また、獣医学又は医学の博士課程では「帰宅した」が73.5%と他の課程に比べ高い割合を示している。（図9-2、クロス集計表3-13～14表）。



「地震発生後の研究室や部局の対応」については、「行動について指示を受けた」40.8%、「情報やニュースの伝達を受けた」30.3%などで、「何も無かった」は16.3%となっている。「何も無かった」は文科系では22.2%と理科系の14.2%に比べて高い割合となっている（クロス集計表3-15表）。

「地震発生後の研究室や部局の対応をどの様な手段で受けましたか」という問に対して、最も高い割合を示したのは、「電子メール」46.0%、次いで、「直接口頭で」21.5%、「安否確認の問い合わせを受けた」20.8%などとなっている。専門職学位課程では「直接口頭で」が1.3%と低くなっていて、「掲示等」が23.8%と他の課程に比べて非常に高い割合となっている。文科系では「直接口頭で」11.0%に対して、理科系では25.1%と倍以上の差がある（クロス集計表3-16表）。

「大震災時に、大学のあなたに対する対応は十分でしたか」という質問に対しては、「十分だった」32.7%、「まあ十分だった」33.5%と合わせて66.2%が十分だったと評価している。逆に「あまり十分ではなかった」3.7%、「十分でなかった」4.3%と合わせても8.0%が不十分だと評価している。男女別などで差はほとんど見られない（クロス集計表3-17表）。

「東日本大震災後に、あなたは情報を収集するためにどうしましたか」という問に対して、「(選択肢のようなことは)とくに何もしなかった」が24.1%と最も高い割合を占めている。ついで、「東京大学のホームページにアクセスした」22.8%、「自分が所属している、または所属予定の先輩やスタッフ、同級生に電話やメールした」20.4%、「自分が所属している、または所属予定の研究科ホームページにアクセスした」17.6%などとなっている。

「自分が所属している、または所属予定の研究科教員に電話やメールした」は理科系14.8%に対して、文科系では7.3%と倍以上の差が見られる（クロス集計表3-18表）。

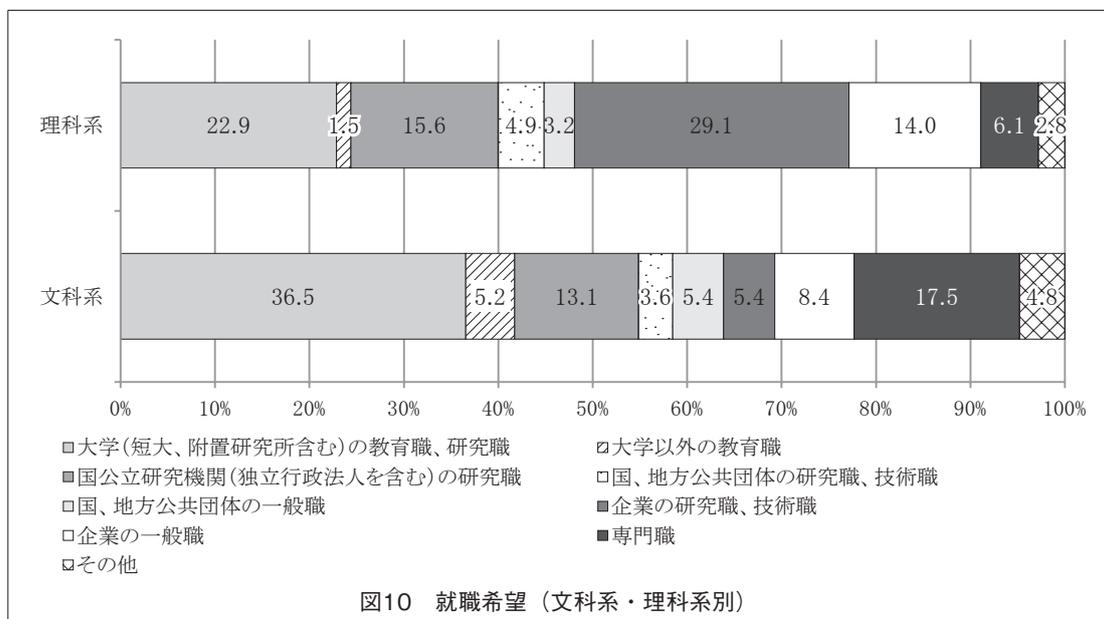
「大学に非常時に備えた備蓄があることを知っていましたか」という問に対して、「どのようにして入手できるか知っていた」は0.7%に過ぎず、「入手方法は分からないがあることは知っていた」が23.9%で合わせても知っていたのは24.6%となっている。これに対して、75.4%は「知らなかった」と答えている。男女別などで有意な差は見られない（クロス集計表3-19表）。

## 1-4. 就職

- ・修士課程在籍者は大学院修了後、「研究職や専門職以外で就職したい」35.0%、博士課程在籍者は「研究職に就職したい」30.5%が第1希望
- ・就きたい職種「大学の教育職、研究職」26.5%
- ・就職の見通しは「かなり厳しい」と「たたない」が文科系44.6%、理科系30.0%

修士課程修了後の進路希望（2つまで選択）は、全体としては「研究職や専門職以外で就職したい」がもっとも高い割合で、35.0%となっている。これを文科系、理科系別にみると、文科系は「修士課程と同じ研究室の博士課程へ進学したい」と「研究職や専門職以外で就職したい」がともに29.5%と約3割を占め第1位である。一方、理科系は、「研究職や専門職以外で就職したい」が36.8%で第1位であり、「研究職に就職したい」28.3%を凌いでいる。博士課程修了後の進路希望（2つまで選択）は、全体としては「研究職に就職したい」30.5%となっている。また、「特別研究員などとして残りたい（研究生を除く）」の4つの選択肢を合せると、39.2%で約4割の者が研究員を希望している。この値は、前回調査（2009年）よりもやや減少している（クロス集計表4-1～2表）。

将来の就職先としては、「大学（短大、附置研究所を含む）の教育職、研究職」が26.5%で、前回調査（2009年調査）同様最も多く、次いで「企業の研究職、技術職」22.9%、「国公立研究機関（独立行政法人を含む）の研究職」14.9%と続いている。前回より「企業の研究職、技術職」が少し増加し、「国公立研究機関（独立行政法人を含む）の研究職」が5ポイント以上減少している。「大学の教育職、研究職」は、男子にも女子にも人気が高く、ともに第1位に挙げられている。しかし、男子では前者が25.7%に対して「企業の研究職、技術職」が25.6%とほとんど差が見られない。また、専門職学位課程在籍者は「専門職（弁護士、公認会計士、税理士、医師等）」を希望する傾向が53.7%と強くなっている。文科系では「大学の教育職、研究職」が36.5%、理科系では22.9%と差が見られる。理科系では「企業の研究職、技術職」が29.1%に対して、文科系では5.4%に過ぎない（図10、クロス集計表4-3表）。



「就職の見通しについて、どのように考えていますか」という質問に対して、34.1%（前回調査36.3%）と約3分の1が「かなり厳しいと思っている」及び「見通しがたたない」と回答しており、特に文科系は44.6%と4割以上を占

めている（クロス集計表4－4表）。

就職の情報について全体では、「自分で情報収集に努める」と答えた者が62.9%と最も多く、特に修士課程者（69.4%）、および専門職学位課程者（85.2%）で高い傾向が見られる（クロス集計表4－5表）。

教育職、研究職を目指している者に、「博士課程修了後、何年位で教育職、研究職に就けると思いますか」と尋ねたところ、「見通しが立たない」37.6%と前回より9ポイント増加しており、厳しい状況と認識されていることがうかがえる。次いで「3～5年」が25.0%と続いている（クロス集計表4－6表）。



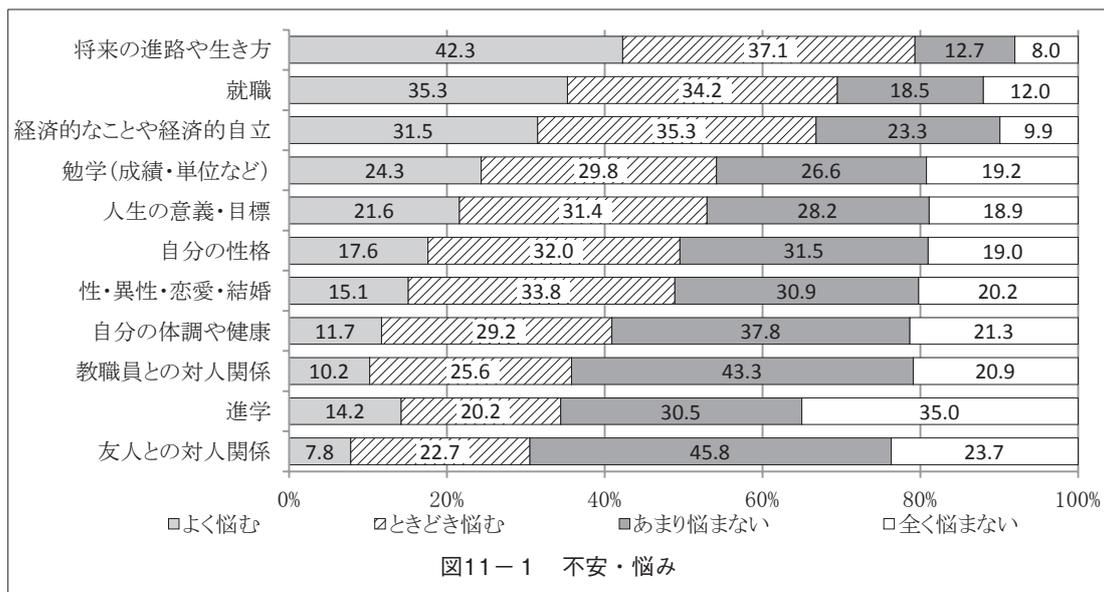
安田講堂前

## 1-5. 不安・悩み

- ・「将来の進路や生き方」に79.4%の大学院学生が悩みや不安を感じている。
- ・「よく相談する相手」は友人が多く、大学の相談所は少ない。
- ・「経済的支援」を求める大学院学生が77.8%に達した。

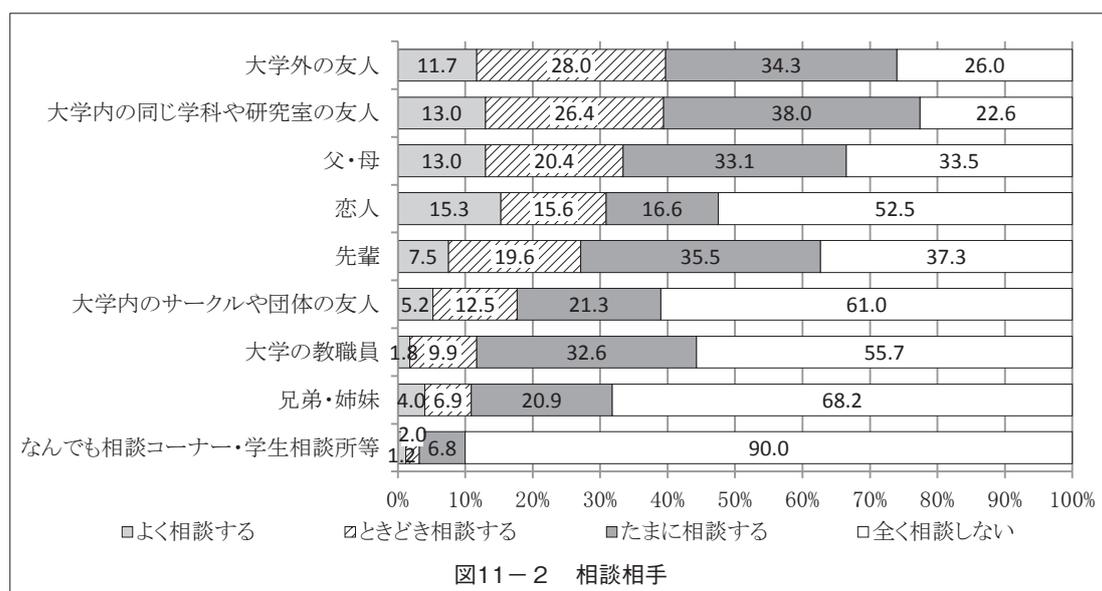
学生生活の中で悩みや不安を感じるものとして、大学院学生が「よく悩む」と答えた質問項目は、「将来の進路や生き方」が42.3%で最も多く、「就職」35.3%、「経済的なことや経済的自立」31.5%が続いた。とくに「将来の進路や生き方」と「就職」については悩みを抱える大学院学生の割合が高く、「ときに悩む」を加えると「将来の進路や生き方」が79.4%、「就職」は69.5%に達した。ただし、いずれの項目も前回よりわずかではあるが、「よく悩む」と回答した者の割合は減少している。

この質問項目に関して、修士課程と博士課程では顕著な違いは見られなかった。性別による違いについては、全体に女子学生の方が悩んでいる割合が高い。とくに、「将来の進路や生き方」に関しては男子40.1%に対して女子48.3%と男女で顕著な差が見られる。「経済的なことや経済的自立」に関しては、文科系（38.2%）の方が理科系（28.8%）よりも悩んでいる割合が高く、顕著な差が見られる。また、とくに専門職学位課程の学生に「勉学」についての悩みを訴える割合が44.4%と高かった。（図11-1、クロス集計表5-1-1～11表）

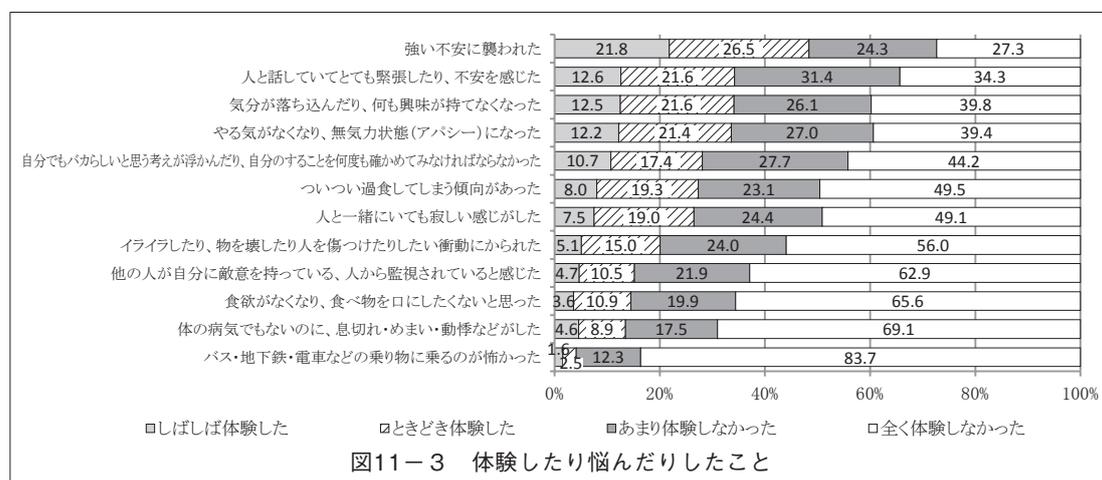


不安や悩みの相談相手では、「よく相談する」または「ときに相談する」相手は、「大学外の友人」が39.7%で最も多く、「学内の同じ学科や研究室の友人」39.4%、「父・母」33.4%、「恋人」30.9%が続いた。

「父・母」を相談相手とするかどうかについては、性別による顕著な差が認められ、女子学生の方が「相談相手とする」と回答した割合が高い（男子27.4%、女子49.7%）。また、対照的に、相談する相手として回答された割合が低かったのは、「なんでも相談コーナー・学生相談所等」（3.2%）および「大学の教職員」（11.7%）であった。（図11-2、クロス集計表5-2-1～9表）

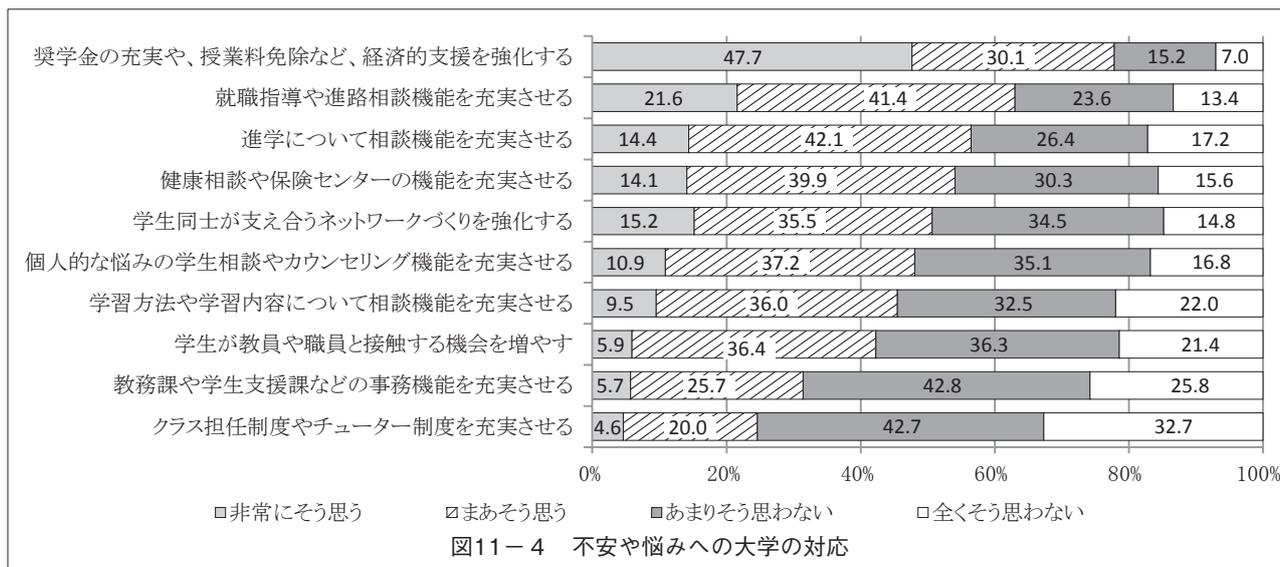


最近6ヶ月の間に、体験したり悩んだりしたこととしては、「しばしば体験した」「ときどき体験した」を合わせると、「強い不安に襲われた」は48.3%、「人と話していてもとても緊張したり、不安を感じた」は同じく34.2%、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」は34.1%、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」は33.6%、「ついつい過食してしまう傾向があった」は27.3%であった。いずれも前回よりわずかではあるが、減少傾向にある。こうした体験に関しては、全体的に理科系よりも文科系の方が割合が高い傾向があるが、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）に」が理科系32.5%に対して文科系36.0%など、それぞれ顕著な差というほどではない。また、性別による違いは、全質問項目にわたって女子学生の方がこうした体験をしている割合が高いが、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）に」が男子31.1%に対して女子39.1%などそれほど顕著な差というほどではない。（図11-3、クロス集計表5-3-1～12表）

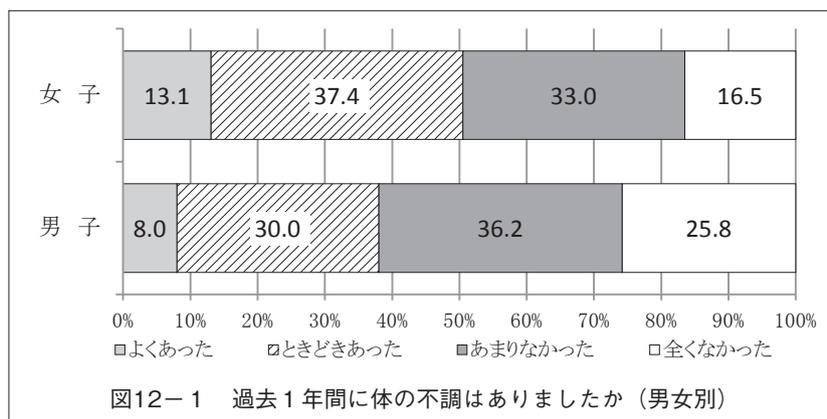


悩みや不安を解消するために大学の対応として望むこととして「非常にそう思う」「まあそう思う」と回答した者を合わせると、「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援」を求める声が77.8%と群を抜いて多い。ただし、前回より6ポイントほど減少している。続いて、「就職指導や進路相談機能を充実」が63.0%、「進学について相談機能を充実」が56.5%、「健康相談や保健センターの機能を充実」が54.0%、「学生同士が支え合うネットワークづくりを強化」が50.7%となっている。こうした要望に対して、性別、在学課程、文科系・理科系でのとくに顕著な違いは

見られない。(図11-4、クロス集計表5-4-1~10表)

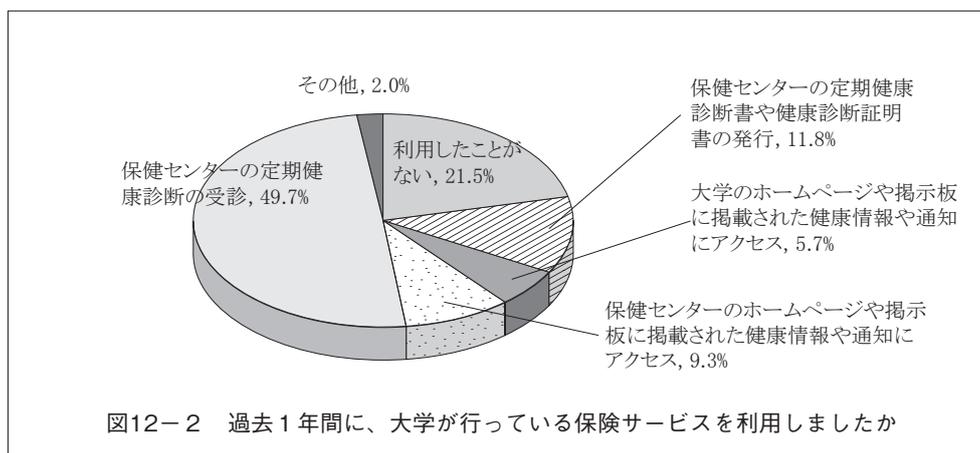


「過去1年間に体の不調はありましたか」という質問に対しては、「よくあった」9.5%、「ときどきあった」31.9%と合わせて約4割(41.4%、以下同じ)の学生が不調を訴えている。男子(38.0%)より女子(50.5%)の方が不調を訴える者の割合が高くなっている(図12-1)。課程別などでは有意な差は見られない。



不調を訴えた者に、「体の不調があったときに、どのように対処しましたか」とたずねたところ、「地域のクリニックや病院を受診」が34.8%と最も高く、次いで「家族に相談」(23.9%)が高い割合を占め、次いで、「保健センター(本郷・駒場・柏)の診療部を受診」が16.9%と続き、「保健センター(本郷・駒場・柏)の健康管理室に相談」は1.0%に過ぎない。男女差などは見られない。(クロス集計表5-4-11~12表)

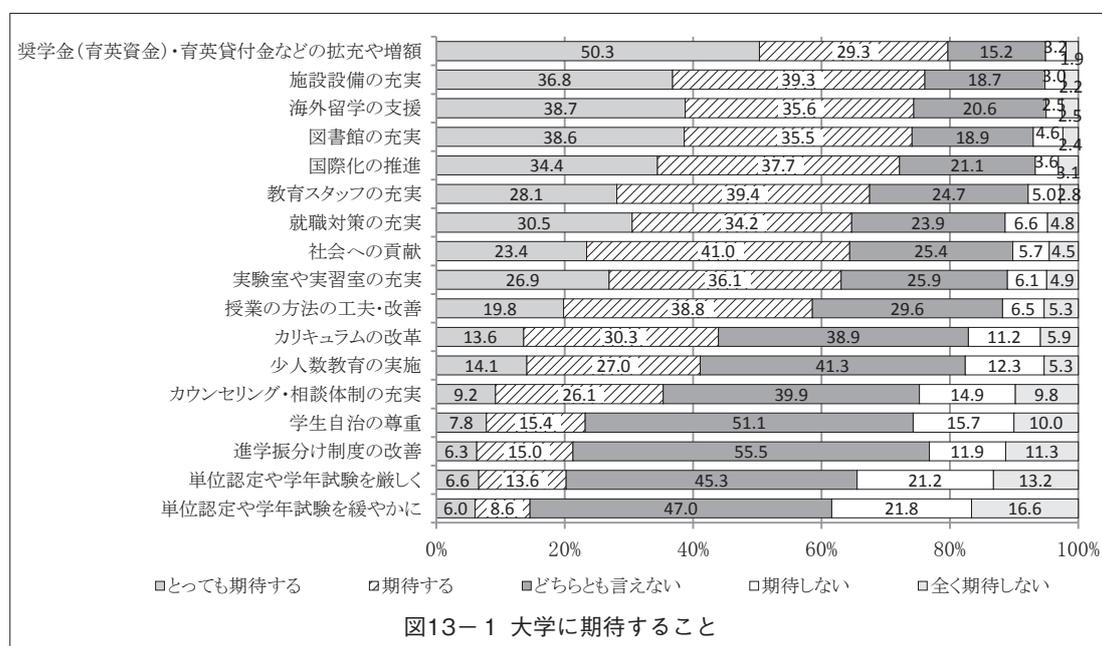
「過去1年間に、大学が行っている保健サービスを利用しましたか」については、「保健センターの定期健康診断の受診」が49.7%と最も高い割合を占め、次いで、「利用したことがない」21.5%、「保健センターの定期健康診断書や健康診断証明書の発行」11.8%などとなっている(図12-2)。女子の方がやや利用率は高いが大きな差ではない。修士課程で「保健センターの定期健康診断書や健康診断証明書の発行」が19.9%、獣医学又は医学博士課程19.4%と比較的高いほかには、課程別には大きな差はない。文科系と理科系では有意な差は見られないが、「保健センターの定期健康診断の受診」では「未婚」69.0%に対して「既婚」40.0%と顕著な差が見られる。(クロス集計表5-4-13表)

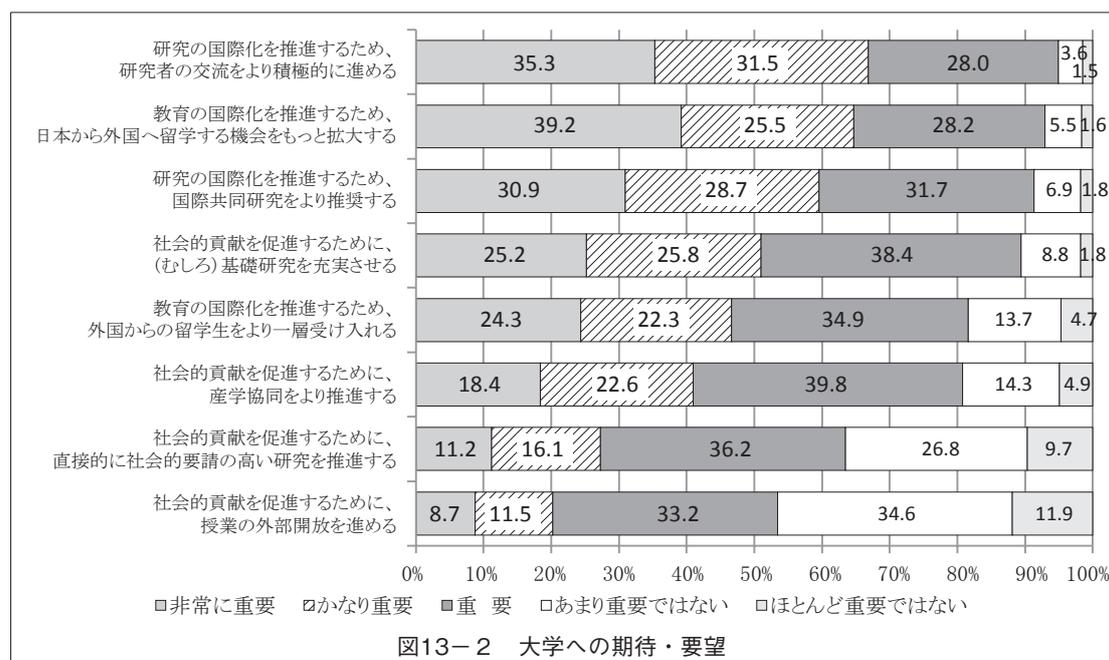


## 1-6. 大学への要望

- ・大学への要望としては、「奨学金などの拡充や増額」(79.6%)「施設設備の充実」(76.1%)「海外留学の支援」(74.3%)がそれに続いた。
- ・大学の社会的貢献や国際化を推進するための関連事項は、「研究者交流」(94.8%)、「日本から外国へ留学する機会を拡大」(92.9%)、「国際共同研究の推進」(91.3%)、「基礎研究の充実」(89.4%)が高かった。

大学院学生が大学に要望・期待することとして最も多く選んだ項目は、「奨学金(育英資金)・育英貸付金などの拡充や増額」(「とっても期待する」と「期待する」を合わせて79.6%、以下同じ)、「施設設備の充実」(76.1%)、「実験室や実習室の充実」(63.0%)などである。上位には施設・設備や留学・国際化などの項目が多い。これらに対して、「学生自治の尊重」を選んだ者は23.2%で、時代の変遷を実感させる結果であった。ただし、この質問は前回までと質問形式を変えており、前回までと厳密に比較することはできない(図13-1, クロス集計表6-2-1~17表)。





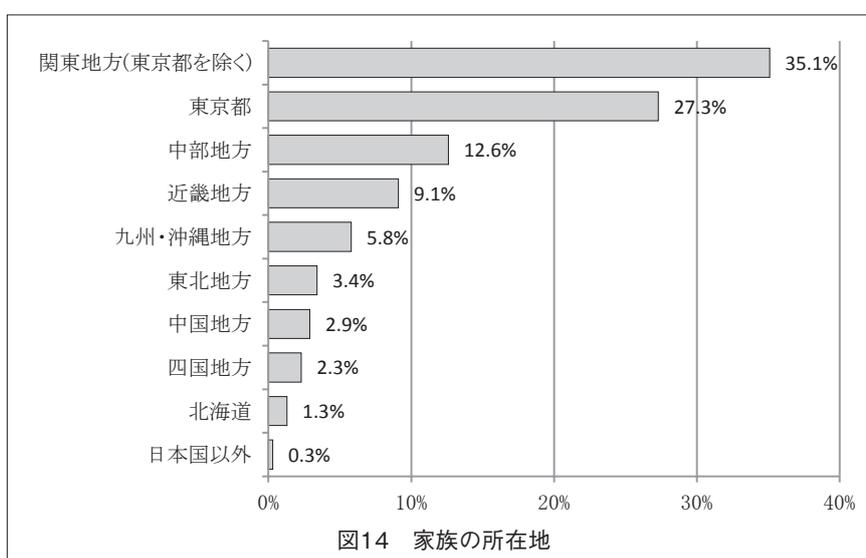
大学の社会的貢献や国際化を推進するための関連する項目については、「非常に重要」、「かなり重要」、「重要」と評価した者の割合を合計すると、「研究者の交流を積極的に進める」94.8%、「日本から外国へ留学する機会を拡大」92.9%、「国際共同研究をより推奨する」91.3%、「基礎研究を充実させる」89.4%が9割前後と高く、「外国からの留学生をより一層受け入れる」81.5%がそれに続いた。充実させたい研究の性格に関しては、「基礎研究」の約9割に対して、「直接的に社会的要請の高い研究の充実」は63.5%にとどまった。大学への要望・期待と同様、経済的環境を反映した結果なのか興味深い点である。「授業の外部開放を進める」ことを重要と認識する学生は前回と同様比較的少なく、「あまり重要でない」、「ほとんど重要でない」を合わせると46.5%に達した（前々回は40.5%、前回は43.2%）（図13-2、クロス集計表6-1-1～8表）。

## 第2部 学生生活の背景

### 2-1. 家庭の状況

- ・実家の所在地は62.4%が関東、前々回前回と変化なし
- ・大学院学生のうち独身者は87.8%、既婚者は12.2%、子どもがいるのは6.7%
- ・父の職業は「専門的、技術的職業」が25.3%、「管理的職業」が20.8%、母の職業は「無職」43.7%、「事務」13.0%、「教育的職業」12.9%

実家の所在地は、「東京都」27.3%、東京都以外の「関東」が35.1%、合計すると62.4%で、前回調査（2009年（第59回））と比較して2.9ポイント増加したが、前々回からほぼ同じ傾向である。男女別では、「東京都」と「関東」で男子の59.8%に対し、女子は69.2%で前回前々回調査と同様男子を上回っている。（図14、クロス集計表7-1表）。

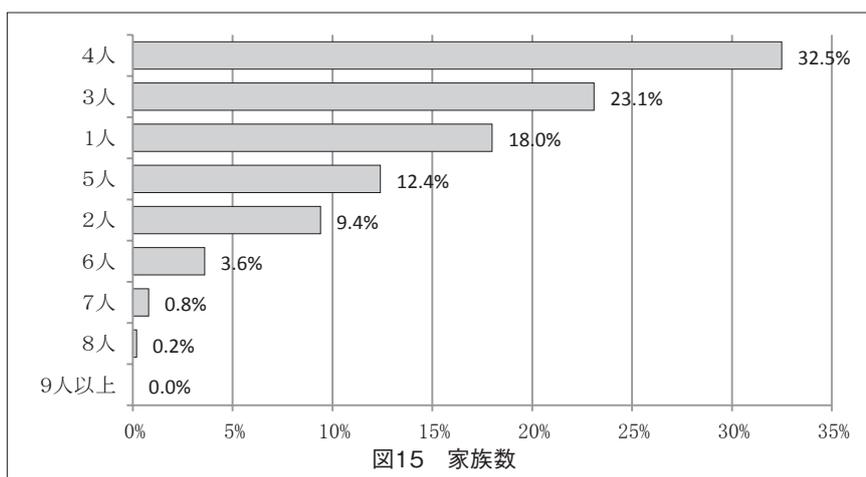


大学院学生のうち独身者は87.8%（前回調査86.5%）、既婚者は12.2%となっている（クロス集計表7-2表）。

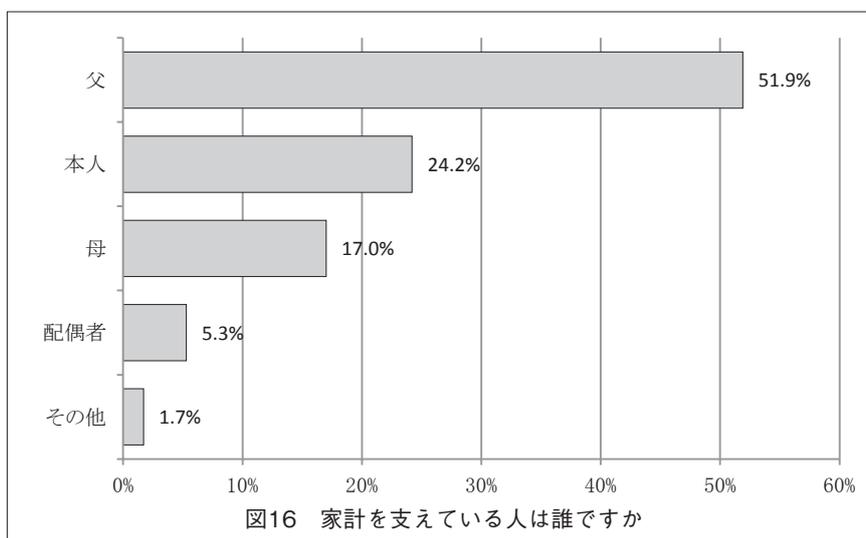
子どもがいると回答したのは回答者の6.7%（男子5.6%、女子9.1%）である。2人以上子どもがいる者は回答者の3.8%である（クロス集計表7-3表）。

子どもの世話について男女別にみると、全体を100%として割合を見ると「自分」が主として世話をしていると回答した者は、男子18.1%、女子53.4%であり、きわめて大きな差が見られる。「配偶者」が主として世話をしていると回答した者は、逆に男子66.6%、女子18.2%である。（クロス集計表7-4表）。

「あなたの家族は、あなたを含めて何人ですか」の問では、「4人」が32.5%（前回調査29.6%）と最も高い割合となっており、次いで、「3人」の23.1%（前回調査24.6%）を合すると半数を超えている。（図15、クロス集計表7-5表）。

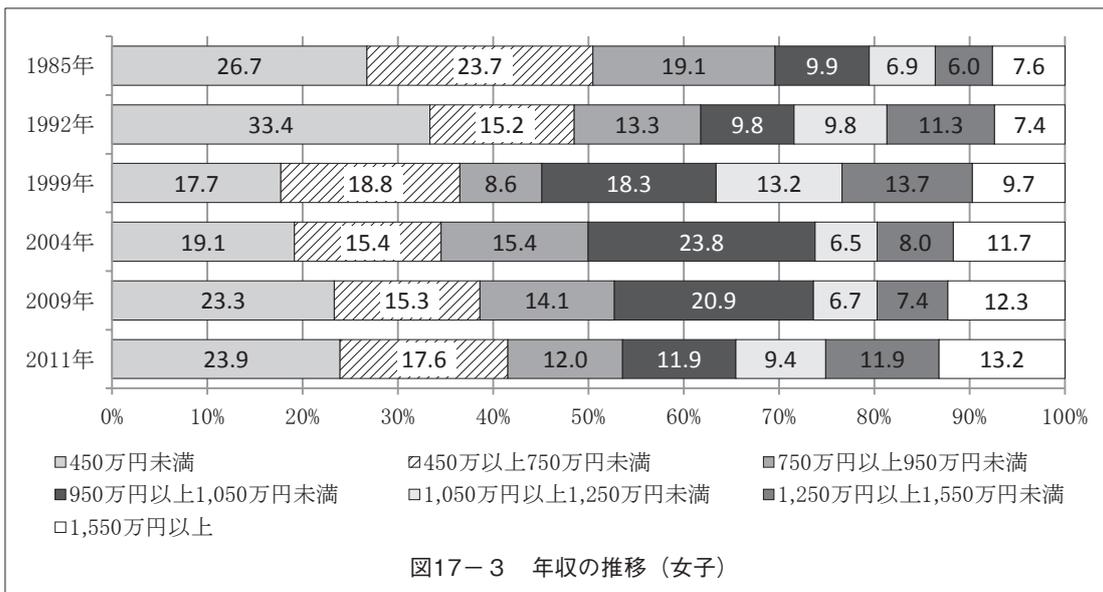
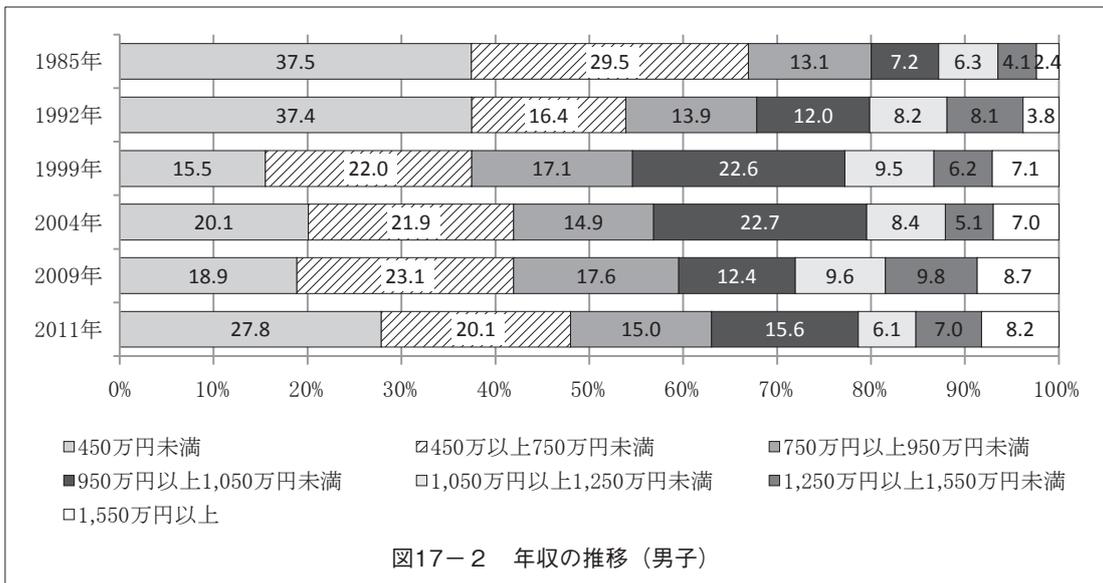
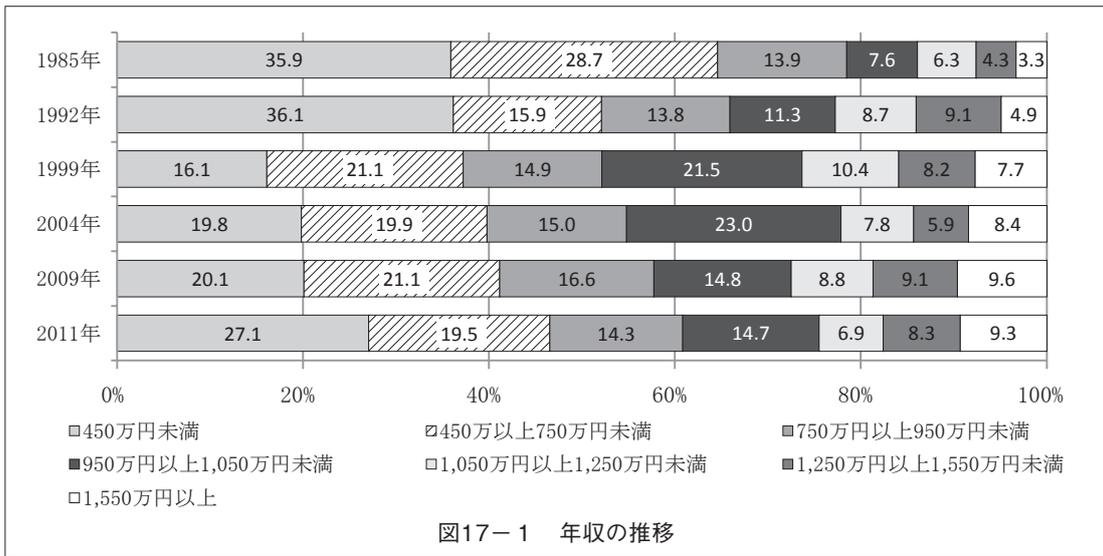


主たる家計支持者は「父」51.9%（前回調査50.2%）、「本人」24.2%（前回調査24.9%）、「母」17.0%（前回調査17.2%）の順となっていた。既婚者に限ってみると、「配偶者」12.3%が未婚者の2.6%より高い割合となっている。既婚者について男女別にみると、「本人」が主たる家計支持者であると回答した者は男子の82.0%、女子の40.4%であり、「配偶者」が主たる家計支持者と回答した者は男子の30.3%、女子の92.3%であった（図16、クロス集計表7-6表）。



職業については、父は「専門的、技術的職業」が25.3%、「管理的職業」が20.8%、「教育的職業」が10.9%であった。母は「無職」が43.7%、「事務」が13.0%、「教育的職業」が12.9%、「専門的、技術的職業」が8.3%であった。なお、本人（職業を持っている者のみ）は「専門的、技術的職業」が64.6%、「教育的職業」が15.7%である（クロス集計表7-8～10表）。

親元の年収（社会人入学者は自分）については、「1,050万円以上」が24.5%であった（前回調査27.5%）。ただし、この問への回答者は55.1%であり、「わからない」が43.0%、その他の1.9%は無記入である。1999年より年収450万円未満の低所得層が次第に増加して、今回は27.1%と全体の4分の1以上となっている。これに対して、1,500万円以上の高所得層は、前回の9.6%より今回は9.3%と減少しているものの長期的には増加傾向にある。（図17-1～17-3、クロス集計表7-7表）。



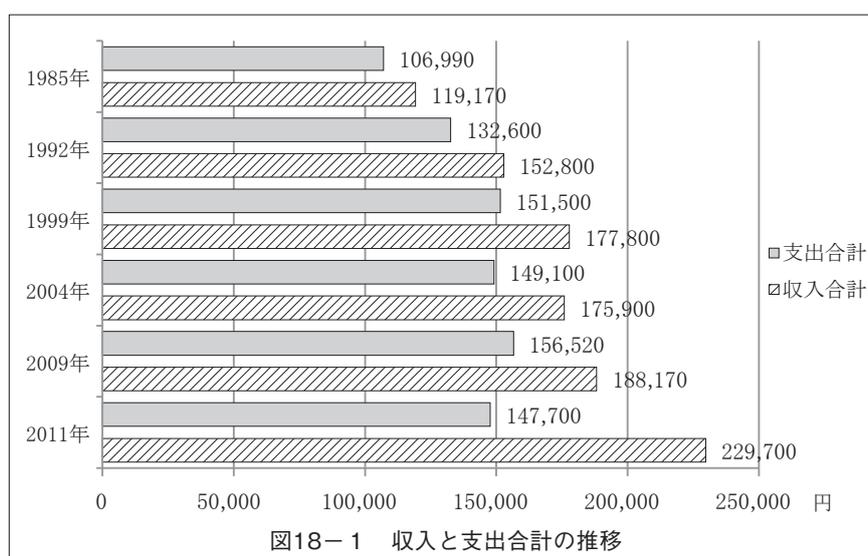
## 2-2. 生活費の状況

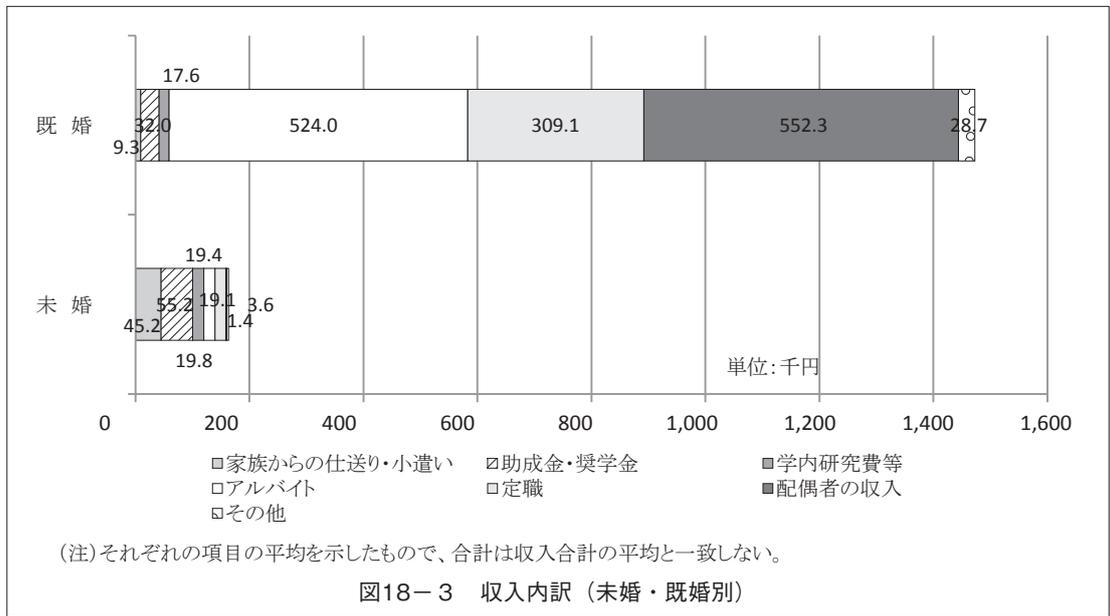
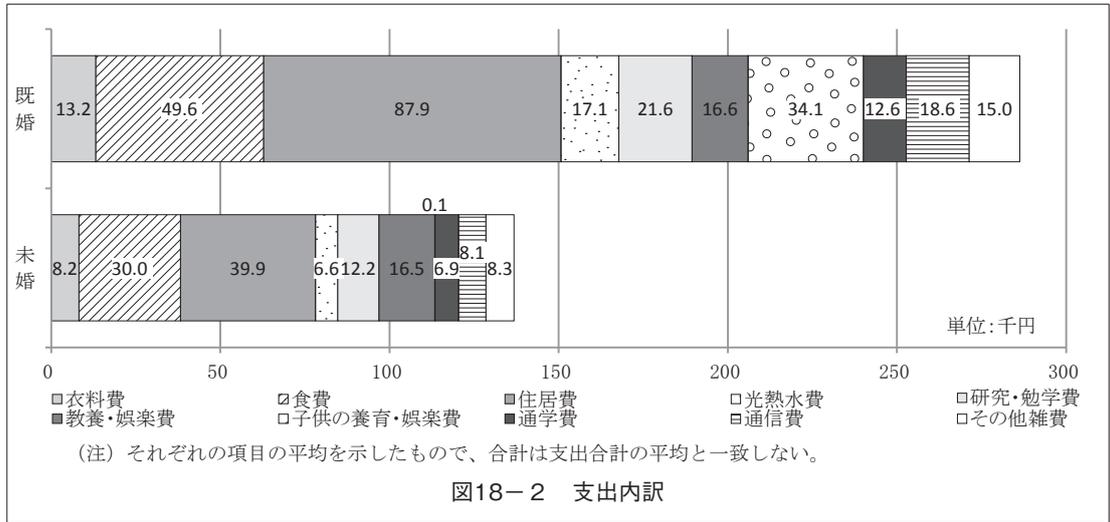
- ・生活費は修士課程124,700円、博士課程157,700円（100円未満は四捨五入）。
- ・収入は修士課程157,800円、博士課程274,200円。
- ・修士課程の収入は「仕送り」（58,000円）、博士課程の収入は「助成金」（88,200円）が最多。

1ヶ月当たりの「支出総額」（100円未満四捨五入）は月平均147,700円で、前回調査時（2009年・第59回）と比較すると、8,800円の減少となっている。修士課程在籍者124,700（前回、以下同じ133,000円）、博士課程在籍者157,700円（177,700円）、獣医学または医学を履修する博士課程在籍者274,900円（244,000円）、専門職学位課程在籍者158,100円（178,300円）となっている。獣医学または医学を履修する博士課程で30,900円増加した以外には、いずれの課程も1から2万円減少している。各費目の支出では、住居費が45,600円と前回調査（48,600円）より3,000円減少しているが、前々回とほぼ同じ水準になっている。他の費目も増減はみられるが、大きな変化はない。

一方、「収入総額」（100円未満四捨五入）は月平均229,700円で、前回調査時から41,500円の増加となっている。修士課程在籍者157,800円、博士課程在籍者274,200円、獣医学または医学を履修する博士課程在籍者525,600円、専門職学位課程在籍者299,800円となっている。獣医学または医学を履修する博士課程在籍者は177,900円、専門職学位課程在籍者109,400円と大幅な増加となっている。収入源としては全体では「助成金・奨学金」が最多で52,500円（前回調査時より5,500円減少）、次いで「家庭からの仕送り・小遣い」41,000円（2,100円減）、「定職」54,400円（16,800円増）となっている。課程別では、修士課程在籍者では「家庭からの仕送り・小遣い」が最多の58,000円であるが、博士課程在籍者では「助成金・奨学金」が88,200円で最多であり、「学内研究経費等」による経費と併せると129,400円となり、前回調査と比較すると9,800円の増加となっている。獣医学または医学を履修する博士課程在籍者と専門職学位課程では「定職」が225,900円と144,100円で最多となっている。前回よりそれぞれ102,400円、104,300円と大幅に増加している。

既婚者では「配偶者の収入」552,300円と多くなっているが、文科系でも「配偶者の収入」が147,400円と理科系の35,100円に比べて極めて多くなっている。（クロス集計表8-1～2表）

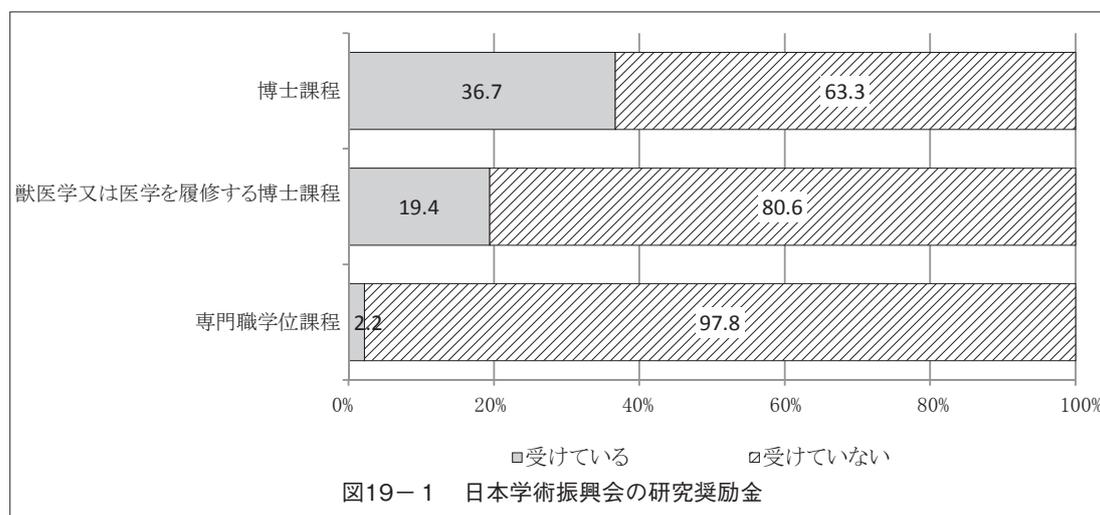




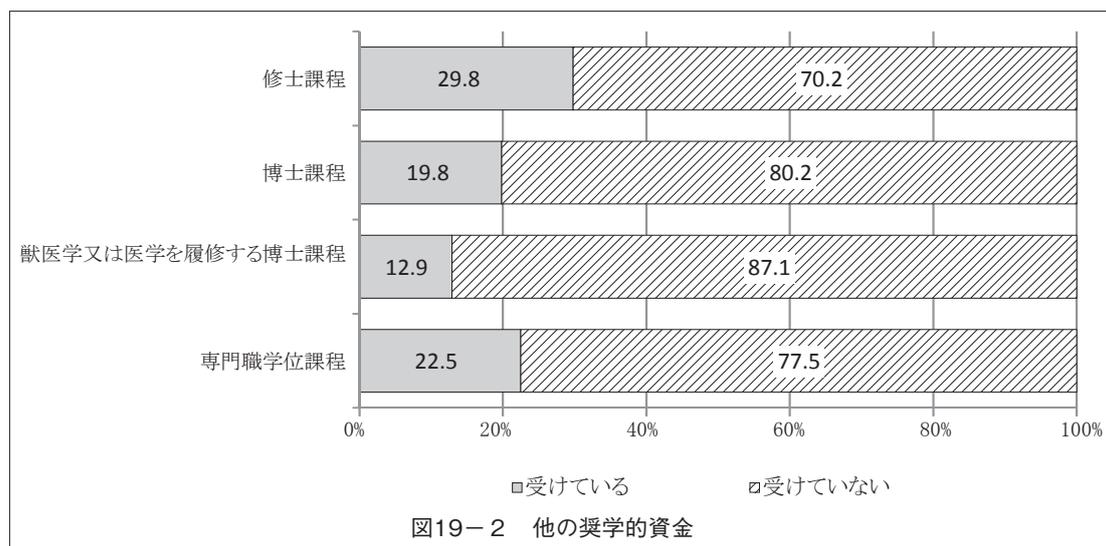
## 2-3. 研究奨励金及び奨学金

- ・日本学術振興会の研究奨励金は29.0%の学生が得ている
- ・その他の奨学的資金は、24.8%の学生が得ている。そのうち多数（66.4%）は日本学生支援機構から貸与を受けている。学術振興会特別研究員は25.1%。
- ・用途は「生活費」（35.2%）、「授業料」（20.9%）、「研究・勉学費」（20.5%）が中心

日本学術振興会の研究奨励金は29.0%が受領している。男女差をみると、日本学術振興会で女子の受領者が多少少なく、男子の31.9%に対して21.5%となっている。課程別では、「専門職学位課程」では、2.2%に過ぎないが、「獣医学又は医学を履修する博士課程」では19.4%、「博士課程」では36.7%が受けている（図19-1）。また、日本学術振興会の研究奨励金を受領していない者のうち「出願資格がない」とした者は21.2%「出願したが採用されなかった」者は23.9%であった。（クロス集計表9-1～2表）



「その他の奨学的な資金」では、受領率は、24.8%で、男子25.7%、女子22.3%とあまり差は大きくない。課程別にも差は見られない（図19-2）。奨学的な資金を受けている者のうち「日本学生支援機構」が66.4%、「日本学術振興会特別研究員」が25.1%となっている。博士課程では「日本学術振興会（特別研究員）」が57.6%と過半数を占めていて、「日本学生支援機構」は38.6%と少ない。それに対して、専門職学位課程では91.3%、修士課程では88.7%が「日本学生支援機構」を受けている。男女や文科系・理科系による差は見られない。「その他の奨学的な資金」では、受領していない者のうち「受ける必要がない」が29.2%と最も高い割合を占め、次いで、「出願資格がない」とした者は27.4%となっており、「出願したが採用されなかった」者は5.4%であった。（クロス集計表9-3～4表）



前回調査と比べて、日本学生支援機構の割合が4ポイントほど低下し、日本学術振興会（特別研究員）が3ポイントほど増加している。その結果、日本学生支援機構と日本学術振興会を合わせた割合は、あまり変わらない。いずれにせよ、学生の得ている奨学的資金の多くは、この二つの組織からのものである。

奨学的な資金の主たる支出目的（3つまで選択可）は、「生活費（衣・食・住居費）」35.2%、「授業料」20.9%、「研究・勉学費」20.5%、「教養・娯楽費」12.8%「貯金」6.6%の順となっている。前回調査と比べてあまり差はみられなかった。（クロス集計表9-5～6表）

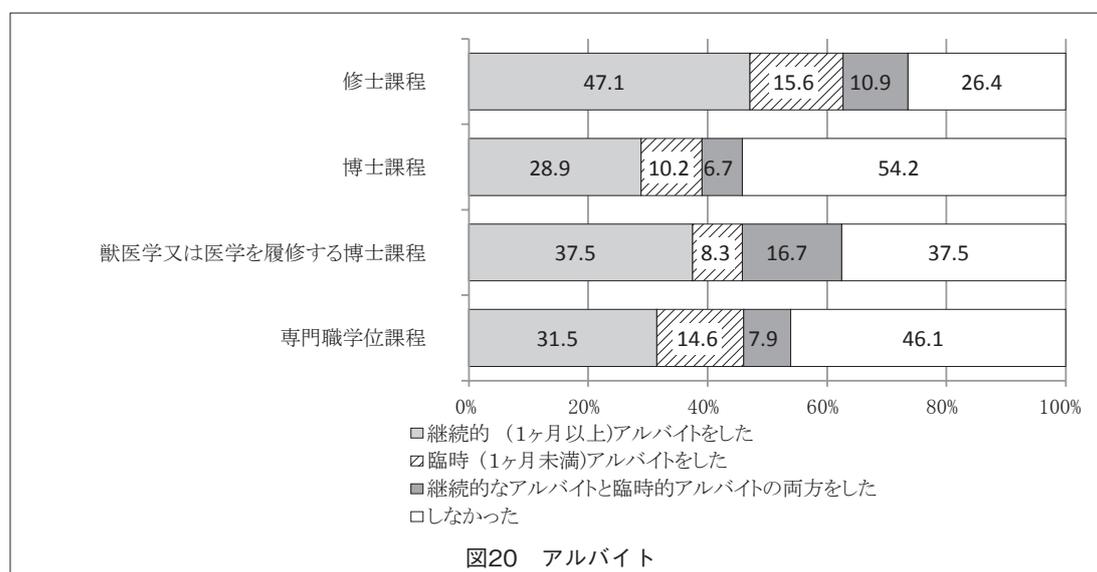


総合研究博物館小石川分館（旧東京医学校本館）

## 2-4. アルバイト

- ・アルバイトをしている大学院学生が61.9%
- ・アルバイトの種類は「TA・RA」(26.1%)、「塾・予備校の講師」(12.7%)、「家庭教師」(8.9%)が多い
- ・週に10.5時間、月額で60,800円(100円未満は四捨五入)
- ・アルバイトの主な理由は「生活費を稼ぐため」が54.0%と最も多い

アルバイトをしていると61.9%が回答しており、前回調査(第59回実態調査)の58.5%に比べてやや増加している。しかし、前々回(第54回)は72.1%に比べると低くなっていることが特徴的である。「継続的」(1ヶ月以上)アルバイトをした者が39.1%と前回調査の37.9%とほぼ同じ割合になっている。しかし、前々回調査の50.1%に比べて低い数字となっている。男女別にみると、男子38.8%に対し、女子は40.1%であり大きな差はみられない(図20, クロス集計表10-1表)。



アルバイトの種類(2つまで選択可)は、「TA・RA」(「TA」はTeaching Assistantの略、「RA」はResearch Assistantの略)は26.1%が最も多く、次いで「塾・予備校の講師」12.7%、「上記以外の専門を生かしたもの」9.1%、「家庭教師」8.9%の順となっている。「TA・RA」は、博士課程では36.7%を占めているが、専門職学位課程では11.7%と3倍以上の差が見られる。

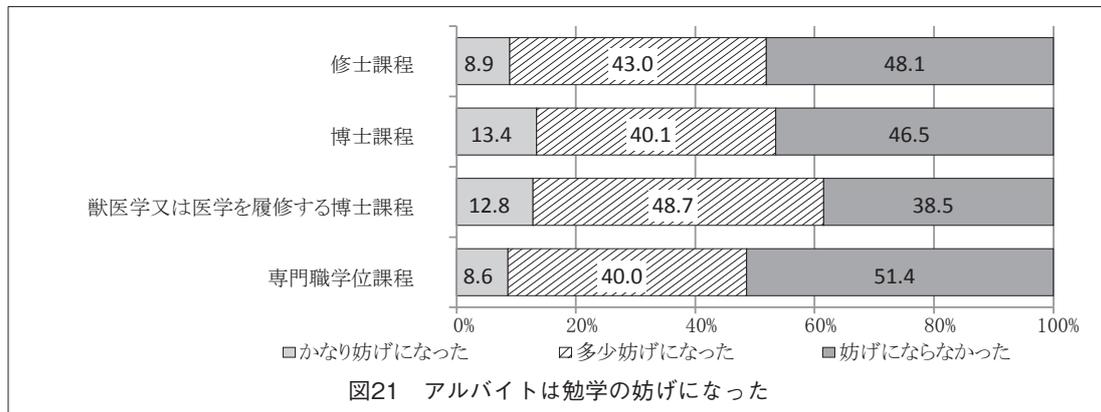
アルバイトに費やした1週間当たりの平均時間は、10.5時間で、これは前回の調査結果12.7時間よりやや減少している。また、1か月当たりの平均収入額は60,800円(100円未満は四捨五入)となっており、前回調査結果の収入額62,400円、前々回の68,900円よりも次第に下がっている。修士課程では、9.6時間、博士課程では11.2時間、獣医学又は医学を履修する博士課程では12.9時間、専門職学位課程では14.2時間となっている。収入では、獣医学又は医学を履修する博士課程で286,000円と他の課程に比べきわめて高くなっている(クロス集計表10-3表)

アルバイトの紹介者(2つまで選択可)は、「友人・知人等」29.2%、「指導教員」19.6%、「インターネット」18.8%と続いていて、前回と「指導教員」と「インターネット」の順位が入れ替わっているが、大きな差ではない。研究科別では、医学系研究科で「指導教員」が34.3%、薬学系研究科で「アルバイト先と直接」が46.2%と高い割合を示しているのが特徴である(クロス集計表10-4表)。

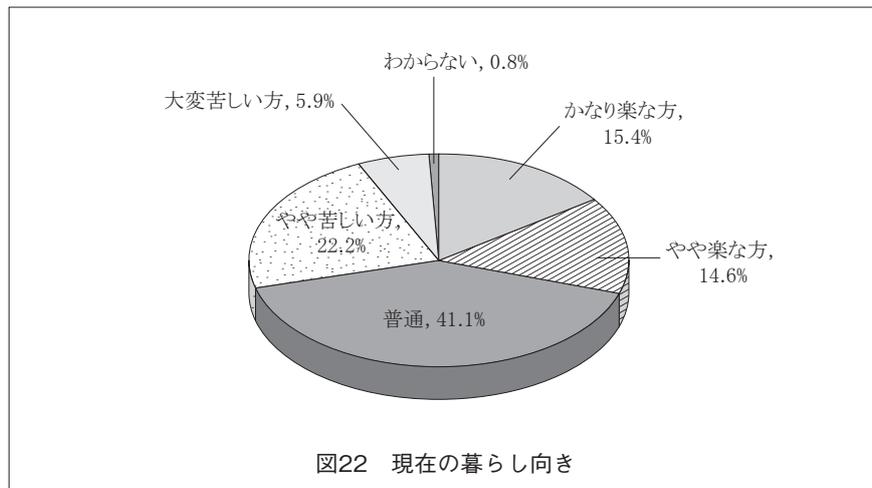
アルバイトをした理由では、「生活費を稼ぐため」と回答する者が54.0%と過半数を占めており、また「勉学費を稼ぐため」13.6%を合すると、約7割に達する。とくに獣医学又は医学を履修する博士課程では、「生活費を稼ぐため」が74.4%と高い割合を示しているが、それ以外には大きな差はみられない。

アルバイト収入の主たる使途（2つまで選択可）は、「生活費（衣・食・住居費）」が39.6%で最も多く、次いで、「教養・娯楽費」25.4%となっている。課程別では、博士課程で「授業料」が13.1%、獣医学又は医学を履修する博士課程で20.3%が高い割合を示している。また、文科系では「研究・勉学費」が23.2%と理科系の7.6%に比べて高い割合となっている。研究科別では薬学系研究科で「生活費」が55.6%と「教養・娯楽費」が44.4%と高いのが目立つ（クロス集計表10-5～6表）。

「継続的アルバイトが勉学の妨げになりましたか」という問い、「かなり妨げになった」10.2%（前回調査12.8%）、「多少妨げになった」42.6%（前回調査41.0%）の回答があり、双方合すると52.8%（前回調査53.8%）を占めた。前回調査と比べてあまり変化はない。研究科別では、総合文化研究科と教育学研究科で「かなり妨げになった」と答えた者が20.3%と18.5%と高いのが目立つ（図21、クロス集計表10-7表）。



現在の暮らし向きについては、「かなり楽な方」及び「やや楽な方」と答えた者は30.0%で、前回調査結果33.5%に比べてやや低下している。さらに、「やや苦しい方」及び「大変苦しい方」と答えた者は28.1%であり、前回調査の結果30.2%に比べてやや減少している。未婚者では「やや苦しい方」と「大変苦しい方」を合わせて27.1%の者が苦しいと感じているのに対して、既婚者では35.4%が苦しいと感じている。研究科別では数理科学研究科と情報理工学系研究科が「かなり楽な方」と「やや楽な方」を合わせて、それぞれ50.0%と48.0%と高いのが特徴である（図22、クロス集計表10-8表）



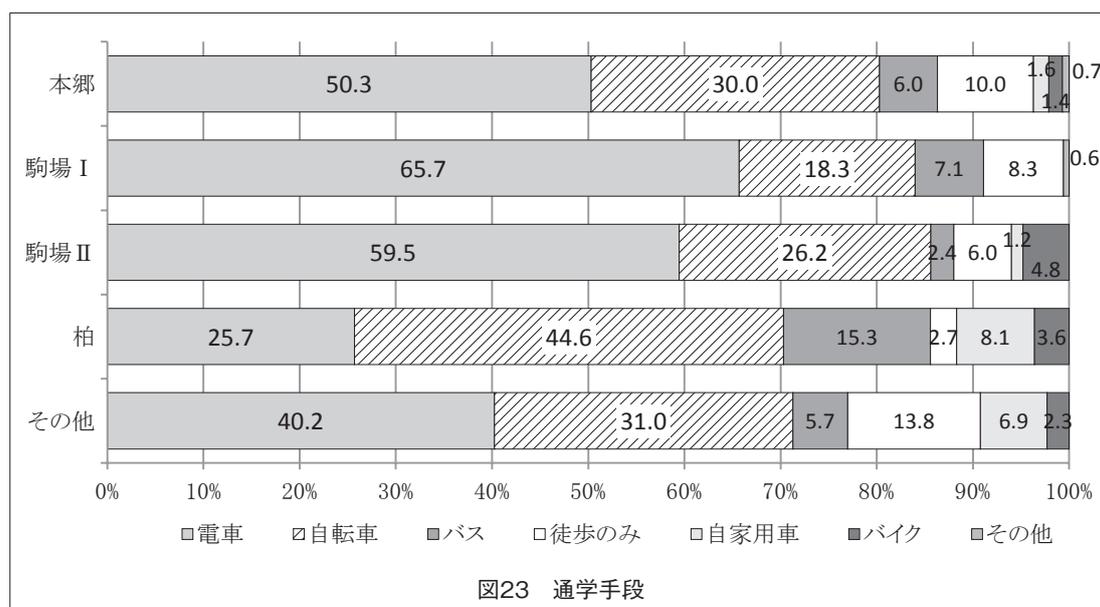
## 2-5. 研究・学生生活のサポート体制

- ・通学に利用している交通機関（複数選択）は、「電車」が48.3%で最も多く、次いで「自転車」30.7%、「徒歩のみ」8.8%、「バス」7.4%の順
- ・「通学所要時間」は平均48.0分
- ・利用者の各施設・設備への満足度は高いが、「研究科内の学生控え室・談話室・ラウンジ」に関しては、不満の方がやや高い。

### 2-5-1. キャンパスへのアクセス

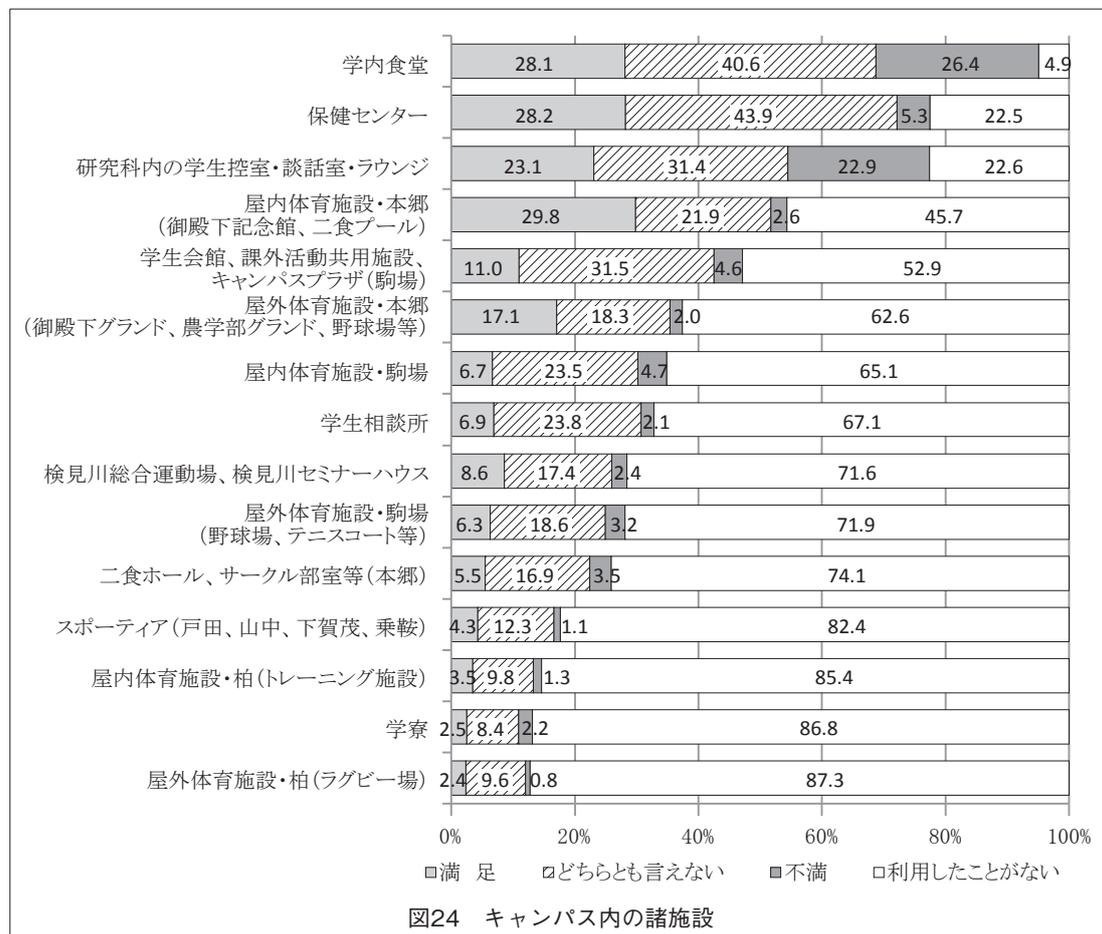
通学に利用している交通機関（複数選択）は、前回と同様に「電車」が48.3%で最も多く、次いで「自転車」30.7%、「徒歩のみ」8.8%、「バス」7.4%の順となっている。キャンパス別で見ると、本郷は「電車」（50.3%）と「自転車」（30.0%）が多く、駒場Ⅰと駒場Ⅱは同様な傾向にあるが、柏は「自転車」（44.6%）が最も多く、また「バス」（15.3%）「自家用車」（8.1%）の利用率が、他キャンパスよりも高い（図23、クロス集計表11-1表）。

通学所用時間は、片道平均48.0分で、前回調査の46.3分、前々回調査の45.9分より少しずつではあるが、次第に長くなっている。キャンパス別では、「その他のキャンパス」が38.9分で最も短く、次いで、柏への所用時間が40.3分、本郷が49.2分、駒場Ⅰが51.3分、駒場Ⅱが52.0分と最も長くなっている（クロス集計表11-2表）。



## 2-5-2. キャンパス内の諸施設

本学の課外活動施設、福利厚生施設等の満足度を全15項目について聞いたところ、図のように、すべての項目で「満足」の方が「不満」より多くなっているが、「研究科内の学生控室・談話室・ラウンジ」に関しては、満足23.1%に対して不満の方が22.9%とほぼ拮抗している。ただし、「学内食堂」、「保健センター」と「研究科内の学生控室・談話室・ラウンジ」を除いて、いずれの項目も利用したことがない者が多くを占めている。(図24、クロス集計表11-3-1~15表)。



## 〔特殊分析の試み〕

### 東大生の不安・悩みについて

はじめに

本調査には1996年度から、得られた結果を踏まえてテーマを絞って考察する「特殊分析」が含まれている。今回の特殊分析では、前回の大学院学生を対象とする調査（2009年度）と同様に、「V.不安・悩みについて」の部分に関して、選択肢の回答と具体的記述に書かれたことを参考にして、前回調査や学部学生を対象とした調査（2010年度）との比較も含めつつ検討してみたい。

#### 1. どのような領域で不安や悩みを感じるか

ここでの質問は、「現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか」というもので、11の領域について「よく悩む」「ときどき悩む」「あまり悩まない」「全く悩まない」のいずれかを選択する回答形式である。以下に、「よく悩む」と「ときどき悩む」の合計%を指標として検討する（表1）。

表1 領域ごとの不安・悩みを抱える学生の割合と順位

| 順位 | 項目           | 今回調査（2011年度） | 前回調査（2009年度） | 学部学生調査（2010年度） |
|----|--------------|--------------|--------------|----------------|
| 1  | 将来の進路や生き方    | 79.4%        | 82.3%（1位）    | 82.8%（1位）      |
| 2  | 就職           | 69.5%        | 75.6%（2位）    | 71.5%（2位）      |
| 3  | 経済的なことや経済的自立 | 66.8%        | 71.1%（3位）    | 63.9%（4位）      |
| 4  | 勉学（成績・単位など）  | 54.1%        | 58.2%（4位）    | 68.4%（3位）      |
| 5  | 人生の意義・目標     | 53.0%        | 56.9%（5位）    | 61.4%（6位）      |
| 6  | 自分の性格        | 49.6%        | 46.0%（7位）    | 54.4%（8位）      |
| 7  | 性・異性・恋愛・結婚   | 48.9%        | 51.3%（6位）    | 55.5%（7位）      |
| 8  | 自分の体調や健康     | 40.9%        | 44.1%（8位）    | 34.5%（10位）     |
| 9  | 教職員との対人関係    | 35.8%        | 37.2%（10位）   | 10.3%（11位）     |
| 10 | 進学           | 34.4%        | 40.2%（9位）    | 61.5%（5位）      |
| 11 | 友人との対人関係     | 30.5%        | 28.8%（11位）   | 41.0%（9位）      |

注）括弧内は当該調査における順位

11項目中、合計%が最も高かったのは、「将来の進路や生き方」で79.4%（前回82.3%）である。これは、2番目に高かった「就職」（69.5%）や、3番目に高かった「経済的なことや経済的自立」（66.8%）とも密接な関係があると考えられる。前回調査（2009年度）や学部学生対象の調査（2010年度）においても同様の傾向が見られ、学部学生・大学院学生に共通する悩みとして、就職難による就職活動の厳しさとともに、将来の生活設計を見据えた進路選択の難しさや学生が抱える葛藤が反映していると言えるだろう。特に、アカデミックなポストを得て仕事をしていくことを希望する大学院学生は、博士課程修了後にも不安定な身分しか得られないことも少なくなく、研究者として安定した生活基盤を築いていくことがイメージしづらい状況となっており、将来設計に関連する不安や悩みを抱きやすいと考えられる。具体的記述にも、「将来就職できるかがとても心配」「研究活動が忙しすぎて就職活動に支障を来さないかが心配」「博士号取得後も研究職ポストに就きにくく、状況が深刻」「博士進学を考えているものの、アカデミックポストに就けるか等がとても心配」といった進路に関連する不安や悩みについての声が多数寄せられた。

「勉学」（54.1%）、「人生の意義・目標」（53.0%）、「性・異性・恋愛・結婚」（48.9%）については、将来設計の問題との関連が考えられる。研究者としてのキャリアを考える大学院学生にとっては、研究成果がうまく出せるかどうかという「勉学」の悩みは、進路決定の問題に直結する。キャリアも含めた「人生の意義・目標」をどのように設定するか、また、恋人ができて結婚まで視野に入れたときにパートナーとの関係をどう考えていくかは、大学院学生の

将来設計に関わる重要な一部である。

前回調査との比較ではほとんどの項目で不安や悩みを抱く割合が低下しているが、「自分の性格」(49.6%)と「友人との対人関係」(30.5%)の2項目については、いずれも前回調査と比較して上昇している。これらの項目は大学院学生よりも学部学生の方が不安や悩みを抱く割合が高い項目であり、大学院学生の心性が、より若年の学部学生の心性に近くなってきていることが示唆されている。

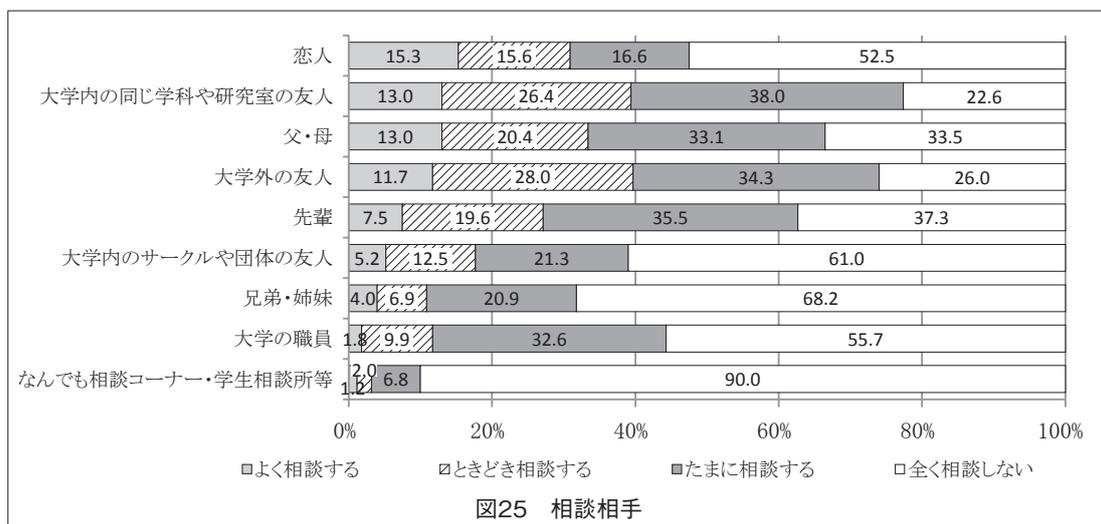
身体的健康は、大学院での研究生生活を充実したものにするための基礎となるものであるが、4割ほどの学生が「自分の体調や健康」(40.9%)で不安や悩みを抱えている。

「教職員との対人関係」(35.8%)の問題は、全体の順位はそれほど高くないが、学部学生と比較すると不安や悩みを抱える学生の割合が多い。研究室における活動が中心となる大学院学生の学生生活では、研究室での対人関係、とりわけ指導教員との関係が重要となる。その関係がうまくいかなくなると、研究活動の遂行や進路決定にも支障が出る可能性が高いため、そこでストレスを感じる学生が多いと考えられる。具体的記述には、「指導教員の桐喝が怖い」「指導教員から「死ぬほど働け」と言われ多大なストレスを感じる」「聞くに耐えない暴言を平気で言い、特定の学生だけ不平等な扱いをする教員がいる」というように教員との関係についての訴えが寄せられており、中にはストレスから心身の健康を害したという学生もいた。

また、1/3を超える学生が「進学」(34.4%)についての不安や悩みを訴えているが、6割ほどが不安や悩みがあると回答した学部学生と比べるとその割合は低くなっており、学部学生の進学の悩みが進学振り分けや大学院への進学に関連して生じていることの表れと考えられる。

## 2. 不安や悩みを誰に相談するか

ここでの質問は、「あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか」というもので、(1)～(9)の対象について「よく相談する」「ときどき相談する」「たまに相談する」「全く相談しない」のいずれかを選択する形式で回答を求めている。不安や悩みを感じたとき、「よく相談する」相手は、「恋人」(15.3%)が最も多く、「大学内の同じ学科や研究室の友人」(13.0%)と「父・母」(13.0%)が同率で続き、さらに、「大学外の友人」(11.7%)、「先輩」(7.5%)、「大学内のサークルや団体の友人」(5.2%)、「兄弟・姉妹」(4.0%)、「大学の職員」(1.8%)、「なんでも相談コーナー・学生相談所等」(1.2%)の順となっている。



相談相手には友人や恋人、先輩等の近い年齢の人たちが選ばれるだけでなく、大学院学生でも親に相談する学生が多いことがわかる。具体的記述では、「友人がいない」「恋人がいない」と記している学生も散見され、主要な相談相手となりうる対人的なつながりが希薄な学生は、問題を一人で抱えることになりかねない危険性が示唆される。また、

他大学から大学院に入ってきた学生は対人関係を広げる機会に乏しく、孤立しやすいため、留学生を含めた他大学出身の大学院生が、東京大学での大学院生活にスムーズに入っていけるように、対人ネットワーク構築の支援を充実していくことが望ましいだろう。

悩みが生じたときに、なんでも相談コーナーや学生相談所等の相談施設に「よく相談する」学生は、前回調査(0.9%)よりも増加している(1.2%)。このことは、広報活動等を通して、学内の相談施設の認知と利用が広がっていることを示唆している。しかしその一方で、自由記述には、「学生相談所に相談に行っても、人員が足りず1~2週間先の予約を取らなければならず、利用しにくかった」といった記述や、「学生相談のシステムは大変な難しいシステムだが、まだ敷居が高い印象がある」といった記述も見られた。学生のニーズに対応するための相談体制の強化に加えて、学生がより気軽に学生相談所等の相談施設を利用できるような対策を講じていく必要があるだろう。

一方で、「大学の教職員」に「よく相談する」という大学院学生の割合は減少している(前回2.7%→今回1.8%)。自由記述の中には、「教員の人間性に問題がある」といったものや、「事務職員の対応マナーが悪い」と教職員への不信感を表明しているものが散見された。研究指導や窓口業務で日常的に学生と接している教職員が、学生からより信頼され、身近な立場で学生のサポートができるように努めていくことが求められる。

### 3. メンタルヘルスに関わる体験について

メンタルヘルスに関わる体験についての質問は、「あなたは最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか」というもので、(1)~(12)の項目について、「しばしば体験した」「ときどき体験した」「あまり体験しなかった」「全く体験しなかった」のいずれかを選択する形式で回答を求めている。

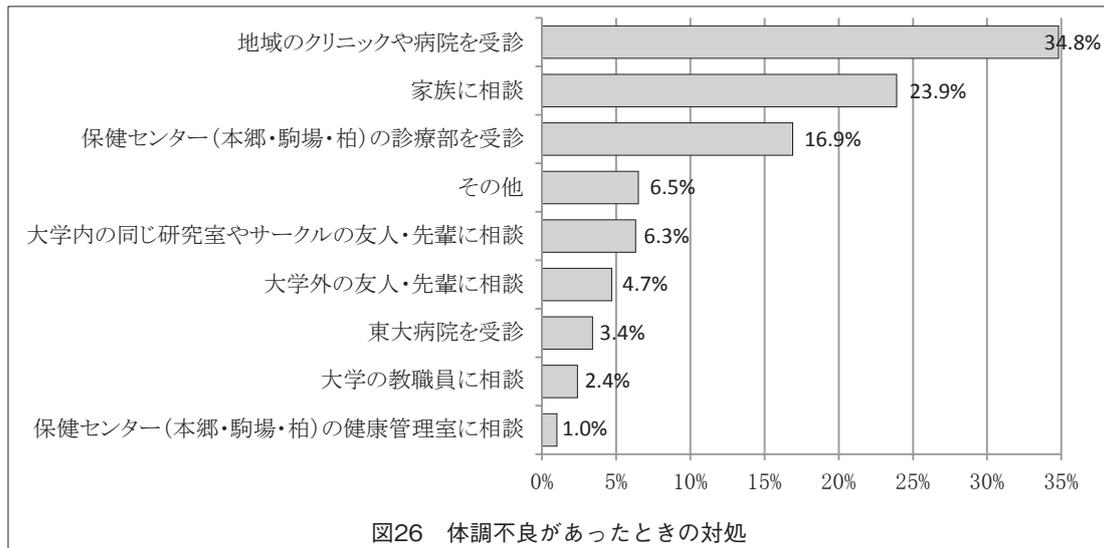
「しばしば体験した」または「ときどき体験した」と回答した学生の割合をみると、上位3項目は「強い不安に襲われた」(48.3%)、「人と話していてもとても緊張したり、不安を感じた」(34.2%)、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」(34.1%)となっている。これらの体験は、ひどい場合には「不安障害」や「鬱病」と診断されるケースも含まれると考えられる。この値からすると、大学院学生の中にはメンタルヘルスの状態が思わしくない学生が一定数いることが推察される。

第4位以下は、「やる気がなくなり、無気力状態(アパシー)になった」(33.6%)、「自分でもバカらしいと思う考えが浮かんだり、自分のすることを何度も確かめてみなければならなかった」(28.1%)、「ついつい過食してしまう傾向があった」(27.3%)、「人と一緒にいても寂しい感じがした」(26.5%)、「イライラしたり、物を壊したり人を傷つけたい衝動にかられた」(20.1%)等である。これらのメンタルヘルスに関する体験についても、かなり多くの学生が体験しているようである。

また、体験者の割合の高低については前回調査(2009年度)と同様の傾向であるが、すべての項目で体験者の割合が減少しており、若干はであるが、大学院学生のメンタルヘルスは改善傾向にあると考えられる。

### 4. 体の不調とその対処

今回の調査で、過去1年間に体の不調が「よくあった」または「ときどきあった」と回答した学生は、合わせて41.4%であった。体の不調が「よくあった」「ときどきあった」「あまりなかった」と回答した学生の中で、地域のクリニックや病院を受診した者が34.8%、家族に相談した者が23.9%、保健センターを受診した者が16.9%であった。(図26)



大学が行っている保健サービスの利用については、「保健センターの定期健康診断の受診」が49.7%で最も多く、「利用したことがない」(21.5%)、「保健センターの定期健康診断書や健康診断証明書の発行」(11.8%)が続いている。多くの学生が健康管理のために保健センターを活用していることがわかる。大学が行っている保健サービスへの満足度は、「満足」が41.2%、「どちらとも言えない」が52.4%、「不満」が6.4%となっており、基本的に受け入れられていると言えるだろう。ただし、自由記述の中では、「診察時間をもっと長くしてほしい」、「体調が優れないときに休息できるスペースを設けて欲しい」といった要望も寄せられていた。

## 5. 大学に望む対応

悩みや不安を解消するために、大学院学生は、大学に対してどのような対応を望むのだろうか。各要望項目について「非常にそう思う」と「まあそう思う」の合計の第1位が「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援を強化する」(77.8%)、第2位が「就職指導や進路相談機能を充実させる」(63.0%)、第3位が「進学について相談機能を充実させる」(56.5%)である。この3項目は、前回調査(2009年度)や学部学生対象の調査(2010年度)でも上位3位に入っており、学生が一貫して、経済的支援や進路決定に関する支援の充実を訴えていることがわかる。

第4位以下は、「健康相談や保健センターの機能を充実させる」(54.0%)、「学生同士が支え合うネットワークづくりを強化する」(50.7%)、「個人的な悩みの学生相談やカウンセリング機能を充実させる」(48.1%)等が続いている。保健サービスや学生相談等の専門的支援の充実だけでなく、学生同士が支え合えるような大学コミュニティづくりが求められていると言えるだろう。

## 6. おわりに

以上の結果から、非常に多くの大学院学生が不安や悩みを抱えている現状が明らかになった。数ある不安や悩みの中でも、将来設計に関して不安や悩みを抱く大学院学生が非常に多いと言える。また、経済的に困窮している大学院学生が多く、奨学金の充実や授業料免除等経済的支援の充実を求める声が非常に強くなっている。さらに、研究を遂行する上で密接にコミュニケーションを行う必要がある指導教員との関係に苦しむ学生も一定数いることが明らかになった。これらの学生生活上のストレスから、メンタルヘルスに関連する問題を体験し、心身に不調をきたしている学生もかなりいることが示唆された。

学業の困難、経済状況の厳しさ、進路決定の難しさ等が増している近年のストレスフルな状況の中で、学生が抱く不安や悩みをゼロにすることは難しいが、学生が不安や悩みを抱えつつも、本学が提供する教育を十分に享受できるように、学生相談・学生支援のさらなる充実が求められていると言えよう。

## 学生委員会学生生活調査室

平成24年11月現在

|       |        |                    |
|-------|--------|--------------------|
| 調査室長  | 柳川 範之  | (大学院経済学研究科・経済学部)   |
| 副調査室長 | 大久保 達也 | (大学院工学系研究科・工学部)    |
| 室員    | 伊藤 洋一  | (大学院法学政治学研究科・法学部)  |
| 〃     | 吉川 雅英  | (大学院医学系研究科・医学部)    |
| 〃     | 出口 剛司  | (大学院人文社会系研究科・文学部)  |
| 〃     | 永原 裕子  | (大学院理学系研究科・理学部)    |
| 〃     | 吉田 薫   | (大学院農学生命科学研究科・農学部) |
| 〃     | 山口 泰   | (大学院総合文化研究科・教養学部)  |
| 〃     | 田中 智志  | (大学院教育学研究科・教育学部)   |
| 〃     | 村田 茂穂  | (大学院薬学系研究科・薬学部)    |
| 〃     | 高野 明   | (学生相談ネットワーク本部)     |
| 〃     | 小林 雅之  | (大学総合教育研究センター)     |
| 〃     | 佐藤 香   | (社会科学研究所)          |
| 〃     | 富田 靖博  | (本部部長 (教育・学生支援部))  |
| 〃     | 関根 弘   | (本部課長 (教育・学生支援部))  |

担当部署 本部学務課学生総務チーム (教育・学生支援部)

◆ 表紙写真 ◆  
柏キャンパス





THE UNIVERSITY OF TOKYO

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部学務課を通じて行ってください。

**東京大学広報室**

no.1432 2012年12月14日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学本部学務課 TEL : 03-3812-2111  
e-mail : [gakumu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:gakumu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>